

平成 5 年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告

No.VII 青少年のスポーツ参加に関する研究  
——第 1 報——

財団法人 日本体育協会  
スポーツ科学委員会

オートレース公益  
資金補助事業



# 平成5年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告

## No.VII 青少年のスポーツ参加に関する研究

### —第1報—

報 告 者 ㊞日本体育協会研究プロジェクトチーム  
青少年のスポーツ参加に関する研究班  
班 長 嘉戸 健<sup>1)</sup>  
班 員 石井 源信<sup>2)</sup> 加賀 秀夫<sup>3)</sup> 加藤 爽子<sup>4)</sup> 菊 幸一<sup>5)</sup>  
杉原 隆<sup>1)</sup> 杉山 哲司<sup>6)</sup> 高橋 京子<sup>7)</sup> 筒井清次郎<sup>8)</sup>  
長見 真<sup>9)</sup> 深見 和男<sup>10)</sup> 宮内 孝知<sup>11)</sup>  
担当研究員 雨宮 輝也（日本体育協会スポーツ科学研究所）

### 目 次

はじめに .....	2
第1部 社会学的側面からの青少年スポーツ参加に関する研究 .....	3
第1章 青少年のスポーツ参加に関する文献資料の分析 .....	3
第2章 青少年のスポーツ参加に関するケース・スタディ的調査研究 .....	8
1. 調査の目的・方法等 .....	8
2. 調査の結果・考察 .....	10
〔関東地区〕	
1) 小学生 .....	10
2) 中学生 .....	13
3) 高校生 .....	17
4) 帰国子女 .....	21
5) ろう学校生徒 .....	23
6) スポーツクラブ所属者 .....	25
〔関西地区〕	
1) 小学生 .....	29
2) 中学生 .....	32
3) 高校生 .....	35
3. まとめ .....	37
第2部 心理学的側面からの青少年スポーツ参加に関する研究 .....	39
第1章 青少年のスポーツキャリアパターンおよびスポーツ継続意識と 結果予期、有能感、勝敗に対する態度との関係	
1 研究の背景と目的 .....	39
2 研究方法 .....	39
3 結果と考察 .....	41
1. スポーツキャリアパターンについて .....	42
2. キャリアパターンと結果予期、有能感および勝敗に対する態度との関係 .....	47
3. スポーツ継続意識と結果予期、有能感および勝敗に対する態度との関係 .....	53
4 まとめ .....	59

1) 東京学芸大学 2) 東京工業大学 3) お茶の水女子大学 4) 東京学芸大学附属大泉校舎 5) 奈良女子大学

6) 山梨英知短期大学 7) 東京学芸大学附属小金井中学校 8) 愛知教育大学 9) 都立大田ろう学校 10) 日本大学

11) 早稲田大学

## はじめに

子どもにとってスポーツは、遊びであり、自由性の高い自発的な活動である。子どもの成長・発達にとってスポーツは発達課題的な要素を持っている。子どもの成長・発達過程で、スポーツが適切に配慮されることによって、子どもの心身の成長・発達やスポーツへの社会化がよりよいものになる。しかし、近年の青少年のスポーツ参加を取りまく環境はけっして望ましいものではない。むしろ、そこには青少年のスポーツ参加をポイルするようのような社会的現象が多く見られる。

技術革新に基づく生活の合理化の進行は、生活の快適さをもたらす反面、私達の自然的、生物的な生活環境を破壊してきた側面もある。そして、それが子ども達の身体活動の機会を減少させ、体力や運動能力の発達にマイナスの影響を及ぼしていると言えよう。また、都市人口の過密化は都市の市街地化をもたらし、都市における子どもの遊び場やスポーツ施設などの運動空間の縮小を生んでいる。しかも、市街地における運動施設からは、スポーツのフォーマル化の進行と安全への配慮のため、子どもの好む自然的、可塑的な要素が取り除かれ、秩序化・画一化・人工化したものが多くなっている。さらに、都市における屋外遊び場の縮小と変質は、子ども達の遊びの場を家の中へと追い込む。そして、この遊びの屋内化の現象は、車による生活道路の占有、大気汚染の進行、テレビやビデオ・ファミコンゲームの普及等によって拍車がかけられている。

核家族化や両親の共働き、少子傾向、兄弟間の年齢差の広がり等は、家庭内で遊び仲間を得難くさせている。そして、高学歴社会と上位校入学を目指す社会的風潮の高まりとお稽古ごとの普及は学習塾や家庭教師、お稽古等による子どもの遊びや運動に対する疎外現象をもたらしている。このような現象は、子どもの生活から自由時間を奪うものであり、本来は子どもの心身の発達を促し、生活の豊かさを実現してくれる運動やスポーツは単なる気晴らし、休息的な機能に留まることにな

る。

青少年のスポーツ界においても青少年のスポーツ参加の隘路となる様々な問題が見られる。今日の青少年のスポーツ参加の特徴として、三層化現象がかなり進行していることが挙げられる。つまり、高度の技術と組織化が進んだフォーマルスポーツ層と同好会的なセミフォーマルスポーツ層、そして、スポーツへの関心の薄いノンスポーツ層の三層である。

フォーマルスポーツ層の青少年スポーツでは、早期からのスポーツ参加によるスポーツ障害やドロップアウト・バーンアウトの問題、管理型スポーツ指導による自発的なスポーツ参加意識の減少、勝利志向主義と排他的意識の行き過ぎによる人間形成の問題、受験とスポーツをめぐる葛藤等の問題がある。セミフォーマル層では、活動の機会に恵まれないことが大きな問題である。たとえば、学校運動部への参加や地域のスポーツ施設の利用をめぐってかなりの欲求不満が見られる。ノンスポーツ層では、スポーツへの関心が拡散しており、その拡散的、気まぐれ的なスポーツ参加を吸収できるシステムが社会に乏しいことが問題である。また、この層についてはこれまで、社会的に無視されるような状況が続いてきたが、社会的にこのようなスポーツ参加を認知していくことが必要である。

学校体育においても、青少年のスポーツ参加をめぐって大きな問題が横たわっている。まず、体育授業のよりどころとなる学習指導要領をさらに、部活動も含めた各学校期のスポーツ生活を生涯スポーツの一時期として充実していくように変えていくことが求められる。具体的には、運動種目の選定や選択、あるいは、学習指導の進め方の工夫、部活動の見直し等が、学習者、学校、地域等の特徴に応じて柔軟にできるようにすることが必要であり、学校内の体育やスポーツと学校外のスポーツ活動との間にある溝をなくすようにすることが求められよう。

(嘉戸 優)

# 第1部 社会学的側面からの青少年スポーツ参加に関する研究

## 第1章 青少年のスポーツ参加に関する文献資料の分析

### 1. 小学生をめぐるインフォーマルスポーツの状況

生活時間について小学生の特徴を上げると、次のようにある。

- 就寝時刻が遅く、起床時刻も遅い。
- 放課後は「学校外の学習」や「習い事」で忙しい。
- 「家事」をあまりしない。
- 学校にいる時間を除けば、朝から夜まで「テレビ」が存在している。

学習塾へ通っている小学生は26%で、学年が上がるにつれて多くなっている。おけいこ事やスポーツクラブに通っている小学生は81%にも達している。いくつもかけもちし、そのうえ学習塾に通っている者もいる。<sup>1)</sup>誰かが切れ目なしにどこかに通っているため、仲間との関係は分断され、遊ぶためにはアポイントを取らなければならない。<sup>2)</sup>その影響は、遊びにも影を落としている。放課後の過ごし方を調べた調査によると、帰宅後に友達と遊んだ子は47%，半数以上の子は友達とは遊んでおらず、その傾向は学年が上がるにつれて顕著になる。遊んだ人数はせいぜい3～4人で遊び仲間の少人数化が見られる。<sup>3)</sup>しかも、遊び仲間は同性の同じクラスの子というように、遊び友達の同質化が進んでいる。異年齢の遊び集団を持つ子は少ない。近隣関係の希薄化により子供同志の関わり合いはクラスに固定され、学校外の仲間関係もクラスの人間関係を引きずっている。<sup>4)</sup>遊びの群れ型が消失し、子供の孤立化が進む中、遊びの内容も、室内遊びが多くなってきている。<sup>5)</sup>また、テレビ視聴の長い子が増えている。「休息型」「気晴らし型」の余暇の過ごし方に長い時間を費やしているのである。テレビ好きの子はマンガもよく読み、一人で室内で過ごす傾向を強めている。<sup>6)</sup>テレビゲームは身近な玩具として子供の世界に定着した。

所有している子は7割を越え、やったことのない子は2%にも満たない。テレビゲームは、本来の遊び、スポーツ、冒険からすれば疑似体験にすぎないが、それらが含んでいるおもしろさに限りなく近いものを手軽に与えてくれる。生身の友達や自然を相手にしなくとも商品として流通している「情報」と遊べるようになった。「人間離れ」「自然離れ」が進行していく。<sup>7)</sup>時間があるはずの休日においても状況は同じである。<sup>8)</sup>

### 2. 小学生をめぐるセミフォーマルスポーツ・フォーマルスポーツの状況

#### 1) スポーツ生活の類型

小学生が社会的な活動を組織的に行う場合、なんらかの団体に所属することになる。これらは、青少年団体と呼ばれ、中央青少年団体連絡協議会の加盟する組織を中心として20数団体ある。活動内容としてスポーツを行っている団体は6割を越える。組織活動の主な目的をスポーツにおいていない団体でも、なんらかのスポーツ活動が行われる場合が多くそれは増加傾向にある。これらの団体は、団員数が100万人を越えるようなものから、地域でサークル的に行われている数人のものまで規模はさまざまである。位置付けも、公共団体により設立運営されている公的色強いものから、スイミングスクールのように営利目的で運営されているもの、地域に有志により設立運営されている極めてプライベートなものまで、組織の形態、運営はさまざまである。子供の所属するスポーツ団体は多岐にわたっており全てを把握することは難しい。<sup>9)</sup>教育関係団体、競技団体、商業スポーツなどの思惑が錯綜し無政府状態にあるといってよい。<sup>18)</sup>

#### 2) スポーツ参加の程度

6割の子はなんらかのスポーツ活動の場を持つ

ている。参加には男女差があり、男子が圧倒的に多い。部活動やスポーツ少年団の参加は4年生以上、民間のスポーツスクールは2年生ぐらいから3、4年生を中心に参加者が多い。いずれも6年生になると参加者がやや減少し、中学まで継続するものは一部の選手を除くと少ない。練習日数、時間など一部には過熱化の傾向が見られる。<sup>10)</sup>少年スポーツの過熱化は、子供の精神にも身体にも深刻な影響を及ぼしている。精神的には、競争心を過度に煽り立てるために緊張状態が続き、スポーツに背を向けてしまう「バーンアウト」、身体的には、使いすぎや間違った練習方法から生じる「スポーツ障害」があげられる。<sup>11)</sup>

### 3) スポーツ文化システム

小学生の9割はスポーツが好きである。「楽しさ」「技術の向上」などスポーツに内在する魅力を求めてスポーツに取り組んでいる。将来も趣味としてスポーツを続けていきたいとするものは多く、生活を豊かにする文化としてのスポーツ観が育ってきている。<sup>12)</sup>限りなく「インフォーマルスポーツ」を求めながら、実際には「セミフォーマルスポーツ」の場合によっては「フォーマルスポーツ」しか提供されていないのが子供の現状である。

### 4) スポーツ社会システム

親は教育投資の一環として、「健康」「躰」の面に期待してスポーツを子供に勧める。スポーツ参加に両親の勧めは、重要な役割を果たしている。両親の多くは、練習や試合を熱心に参観、応援している。両親が子供のスポーツに熱心になればなるほど、子供も熱心に活動するようになり、親子が一体となった取り組みが生まれる。この関係の中で主導権を握っているのは親である。両親は、子供のスポーツへの社会化において重要な役割を果たしており、子供にとって望ましいスポーツとは何かを常に念頭におき、節度をもった接し方をしていく必要がある。<sup>13)</sup>

効率的、即効的効果を期待され、指導者は、管理を強め、勝利至上主義にひた走る。折しも、1979年には小学生でも学校教育活動外の大会であれば全国大会でも出場できるようになり、さらに1987

年には中学生の国体参加が一部の種目で認められ、低年齢からの練習や試合が過熱する結果になる。子供に異様なまでの関心を示す親、自己実現の可能性を子供に託そうとする大人達によって子供はく子供のスポーツの主役の座を追われることになる。自由な意志で異年齢の子供が集うスポーツ集団は、異質集団として多くの可能性を持ちながら混沌としている。<sup>14)</sup>崩壊した遊びの世界を取り込むようにして、**「子供のスポーツ」**は子供の生活に根をおろした。しかし、**「子供のスポーツ」**が盛んになり過熱すればするほど、スポーツそのものが子供の生活や遊びをさらに破壊する結果となってしまっているのである。

### 3. 中・高校生をめぐるインフォーマルスポーツの状況

中・高校生の生活時間は学校を中心に動いている。授業に部活動が加わり学校にいる時間は長い。これに受験に向けた自宅や塾での「学校外の学習」が加わり、学業時間は、中学生で9時間23分、高校生で8時間35分となり、生活時間に占める割合が高くなっている。また、中・高校生は物質的豊かさに囲まれて生活している。2人に1人が個室を持ち、3人に1人がテレビゲームを持ち、最新高性能の音響メカを持つなど、多種多様な物の中で快適に暮らしている。忙しい受験期にありながら、中・高校生の8割は2時間以上テレビを見ている。<sup>15)</sup>マンガを好む者も多く、1日に1時間以上マンガを読む者が15%いる。結果として、友達と遊ぶ時間は短くなり、平日に友達と遊ばなかったという者が8割近くもいる。家の中に閉じ込もるか、塾へ姿を消しているのである。<sup>16)</sup>中・高校生のインフォーマルスポーツを求める事は極めて難しい状態である。

### 4. 中・高校生をめぐるセミフォーマルスポーツ・フォーマルスポーツの状況

#### 1) スポーツ生活の類型

中・高校生がスポーツ活動を行う場合、主として学校の部活動に参加することになる。中学校では部活動参加者のうち80%は運動部所属である。<sup>17)</sup>高校では、入学時約8割の生徒が何らかのクラブ

に所属するが、2年時までに約2割の者がやめ、参加率は57%となる。そのうち68%は運動部所属者であり、運動部が主体である。<sup>18)</sup>スポーツ少年団、商業スポーツなど社会体育への個人的、私的参加もある。

## 2) スポーツ参加の程度

中学の場合、部活動は平均して2時間ぐらい、日曜休日も返上して練習している。70%の者はほとんど練習に参加しており、74%の者は疲労感を感じ、63%の者は学習との両立に悩んでいる。<sup>19)</sup>高校の場合、週の活動日が6日以上の部は9割を越える。公立は平日の活動時間は2時間以内、休日は活動しないのに対して、私立は平日3時間以上、休日も活動している。学校による差が大きい。<sup>20)</sup>いずれにしても、長時間にわたる練習、勝利至上主義、指導者による管理の強化が、部活離れ、バーンアウト、教師の質の低下につながるとの警告が発せられている。<sup>21)</sup>

## 3) スポーツ文化システム

中・高校生は、一般社会人よりもスポーツに親しむ機会も多く、スポーツをすることにも見ることにも関心が高い。<sup>22)</sup>将来のスポーツへの参加意向は高度の技術をめざす者は3%足らずであり、楽しく遊べる程度の技術で良いとするプレイヤー派が半数を占めている。技術より、流行遅れしない服装や道具で楽しく運動することを求めている。<sup>23)</sup>運動欲求が多様化、個別化する中で、「フォーマルスポーツ」に傾倒する学校運動部のあり方が問われている。

## 4) スポーツ社会システム

高校の運動部所属者は多忙であり、自由時間を渴望しているが、充実感は高く、高校生としての自己像に自信を抱く者が多い。<sup>24)</sup>中学でも部活動を楽しいと評価する者は運動部所属者の62%に達し、活動に満足している者は72%となる。生活体験に乏しく、友とのふれあいを持ちにくい今の中学生にとって、貴重な活動の場となっている。部活動の運営に大きな影響を与えるのは指導者である。肉体的にも精神的にも負担になると6割の教師は

感じているが、部活動は非行の防止に役立つと考え、教師の使命として部活動の指導に当たっている。<sup>25)</sup>しかし、教師の私的な熱意に支えられている部分にこそ部活動の抱える問題の根がある。これから指導者には技術指導を中心とするコーチングセンスよりもチームづくり、ムードづくりといったマネージメントセンスが求められる。<sup>26)</sup>意識の切り替えが必要である。施設面、指導面の条件整備が急務であることはいうまでもない。

## 5. 研究方法について

深谷昌志は部活動の調査のまとめの中で「部活動といっても学校差が大きい上に、1つの学校でも部によって活動のスタイルがかなり異なる。部活動は、学校の数に部活動の数をかけた分だけ実態が存在するのかも知れない。こうした意味で部活動は個別化されているのであって、平均的な姿はないという前提に立って、分析を進めるべきである。」と述べている。<sup>27)</sup>多様化、個性化するスポーツの調査研究の手法が検討されなければならない。Hendryの「School, Sport and Leisure—Three Dimension of Adolescence—」は示唆に富んでいる。青少年のスポーツ活動に関する事例研究調査の例を示す。<sup>28)</sup>生涯スポーツに向か、一人一人の運動の関わり方が問題となってくる。個々の事例を丹念にたどり、分析することの中から一人一人が豊かにスポーツライフを楽しむ手がかりが見えてくるのだだと考える。

### 1) 研究の目的・内容・方法

生徒の学校における体育・スポーツの参加状況やその意見と学校側の体育・スポーツに対する考え方のずれを具体的な事例を手がかりに明らかにしようとした研究である。生徒のスポーツ参加に関する学校側の状況と生徒側のスポーツ参加への取り組みや意見、態度などの状況を中心に生徒と学校関係者の両者に面接調査を実施した。

### 2) 調査対象校

- (1) 競技志向、レク志向、不参加の3者の生徒がいる地域性の異なる3校
- (2) 課外活動の幅が制限されている学校1校
- (3) 課外活動が困難な学校1校

### 3) 調査対象者

- (1) 学校内外のスポーツ活動への積極的参加者
- (2) 学校内外のスポーツ活動への不参加者
- (3) 校内のスポーツ活動へは参加しているが、  
校外のスポーツ活動へは不参加の者
- (4) 校内のスポーツ活動へは不参加で、校外の  
スポーツ活動へは参加の者

### 4) 研究事例

#### 【CASE1 楽しみ志向の体育参加者 女子A】

体育の授業ではほとんどの種目が好きで、積極的に活動しているが、ユースクラブでのスポーツ活動の方が楽しいと思っている。体育の授業やスポーツクラブでのスポーツ参加の目的は、競争・緊張的な楽しさを求めているのではなく、友人との社交と健康目的に関わる楽しさである。学校を代表するような競技的なスポーツ活動への不参加理由は次の通りである。1. 学校を本質的に好きではない。2. 先生は子供扱いしており、先生の指示がうるさいと感じている。3. 他の生徒よりも教師から注目される度合いが少なく、体育の時間教師からきちんと教えてもらっていないと感じている。4. 早く卒業して働きたいと思っている。

【コメント】 Aは学校は物事を習うためだけの場所、つまり、あるレベルの成績資格を得るのに有利な場と見ている。体育授業や体育教師の指導について多くの不満を持っていることに教師は気づいていないようである。したがって、Aの学校に対する実利的な考え方やスポーツへの参加目的を理解し、さらに、Aが望んでいるように体育の授業が改善されなければ、Aを学校内外の競技的なスポーツ活動に参加させることはできないであろう。(以下5例があがっている。)

### 5) まとめ

観察に基づく調査研究は、偶然的な関連や影響を見ながら現実の状況を調べようとするものである。この研究の弱点は、統計的な相互関係や差異を認める立場をとっていないため、調査者の判断により、記録し、吟味すべき事象や状況が違ってしまうこともある。構造的事例研究は統計的調査の結果をふまえて引き出され、調査の全体の結果と密接な関係を持ちながら進められ、調査者が個人の内面を重視することで、彼らの論理的な内面

をとらえることができる。事例研究の結果、学校における体育スポーツが生徒に有用な機能を与え、他のレジャースポーツへの関心をかりたてには、授業のあり方、教師と生徒の関係が問題となることが明らかになった。

### 6. まとめ

子供にとって遊びは生活そのものであるはずであった。子供の世界から外遊びは姿を消しつつある。遊びの空間と仲間を失った子供たちは大人の用意した場と仲間の中でスポーツを楽しむことになる。そこは特定の大人により私物化された集団であることが多く、心身に傷を負う不幸な犠牲者を出すことにもつながっていく。多くの研究や文献が青少年をとりまくスポーツの世界の混沌とした状況に対して警告を発してきた。早急に対応がなされなければならない。子供達は確かに変わってきていている。スポーツやクラブにしがみつこうとせず、嫌だとなるとさっさと去っていくのを、指導者は感じていないのであろうか。子供たちに背を向けられる前に、生涯スポーツに向け、一人一人の抱える問題を掘り下げ、対応策が講じられるべきである。

### 参考文献

- 1) NHK 世論調査部「現代小学生の生活と意識」明治図書 1992
- 2) 深谷昌志「遊びと勉強」NHK ブックス
- 3) 福武書店教育研究所「モノグラフ小学生ナウ 遊び(2)」福武書店 1989
- 4) 福武書店教育研究所「モノグラフ小学生ナウ 地域」福武書店 1983
- 5) 福武書店教育研究所「モノグラフ小学生ナウ 子供の放課後」福武書店
- 6) 福武書店教育研究所「モノグラフ小学生ナウ テレビ」福武書店 1987
- 7) 須藤敏明「現代っ子の遊びと生活」青木書店
- 8) 福武書店教育研究所「モノグラフ小学生ナウ 休日」福武書店 1991
- 9) 四国スポーツ研究会「子供のスポーツ、その光と影」不昧堂 1992
- 10) くもん子供研究所「第5回子供モニターアンケート」

- ト」 1992
- 11) 内海和雄「がんばれスポーツ少年」新日本出版社  
1987
- 12) 武藤芳照「子供のスポーツ」東京大学出版会 1989
- 13) 四国スポーツ研究会編「子供のスポーツ、その光と影」不昧堂 1992
- 14) 四国スポーツ研究会編「子供のスポーツ、その光と影」不昧堂 1992
- 15) NHK世論調査部「現代中学生・高校生の生活と意識」明治図書 1993
- 16) 千石保他「日本の中学生」NHKブックス 1990
- 17) 福武書店教育研究所「モノグラフ中学生の世界 中学生の部活動」福武書店 1983
- 18) 福武書店教育研究所「モノグラフ高校生 高校部活今」福武書店 1984
- 19) 福武書店教育研究所「モノグラフ中学生の世界 中学生の部活動」福武書店 1983
- 20) 福武書店教育研究所「モノグラフ高校生 高校部活今」福武書店 1984
- 21) 城丸章夫他「スポーツ部活いま」青木書店 1991
- 22) 文部省編「わが国の文教施策」 1992
- 23) 余暇開発センター「アンケート調査年鑑 スポーツ愛好者の新動向」 1989
- 24) 福武書店教育研究所「モノグラフ高校生 高校部活今」福武書店 1984
- 25) 福武書店教育研究所「モノグラフ中学生の世界 中学生の部活動」福武書店 1983
- 26) 荒井貞光他「中学校・高校生の運動部のあり方にについての調査研究」広島体協 1987
- 27) 福武書店教育研究所「モノグラフ中学生の世界 中学生の部活動」福武書店 1983
- 28) Hendry 「School,Sport and Leisure—Three Dimension of Adolescence—」 1978

(高橋京子)

## 第2章 青少年のスポーツ参加に関するケース・スタディ的調査研究

### 1. 調査の目的・方法等

#### 1) 調査目的

青少年を取り巻く諸々の社会現象(学校5日制、受験競争の激化による通塾現象の若年化・過熱化、遊びの室内化、青少年体力の低下傾向、趣味的活動の多様化等)が青少年のスポーツ参加に及ぼす影響を明らかにする。

#### 2) 調査方法

来年度の全体調査に向けての資料として面接調査を実施。Case Study形式を採用。

#### 3) 調査対象校

・地域—都市部、都市近郊、山間・農村、関東・関西別。  
・学校—小学校(5校)、中学校(5校)、高校(公立進学校上・中位校、私学進学校、スポーツ優秀校、職業高校計7校)、海外帰国子女学校(1校)、特殊学校(ろう学校1校)計19校  
・スポーツクラブ(選手養成型)—3クラブ尚、学校・クラブ4~8名を下記の選定基準にしたがって選び、約120名に面接を実施。面接は班員及び研究協力者が行った。

#### 4) 対象者の選定基準

- ①フォーマルスポーツ層(F)  
校内又は校外の運動部やスポーツクラブに所属し、対外的な競技成績上位の者。
- ②セミフォーマルスポーツ層(SF)  
校内の運動部に入っていて、運動会や体育祭、校内大会で活躍する程度の者。
- ③インフォーマルスポーツ層(IF)  
校内の運動部に入っていないが、体育授業には積極的な者。
- ④ノンスポーツ層(N)

校内の運動部に入ってなく、体育授業にも消極的な者。

#### 5) 対象者の学年

- ・小学校…第5・6学年
- ・中学校…第1~3学年
- ・高校…第1~3学年
- ・クラブ…小学校5・6学年

#### 6) 調査内容

- ①性・学年
- ②所属の部・クラブについて
- ③指導者や指導の仕方について
- ④体育の授業について
- ⑤スポーツへの意識・態度
- ⑥スポーツの悩み
- ⑦他の文化系活動との関係
- ⑧校内生活の状況(好きな教科、成績等)
- ⑨生活時間構造(調査票)
- ⑩テレビ・ファミコンについて
- ⑪学習塾・稽古事とスポーツ活動
- ⑫将来の進路
- ⑬地域の特性
- ⑭第2土曜の過ごし方
- ⑮親や家庭のスポーツへの態度 等

#### 7) 調査協力校

- [関東地区]
- 小学校—
    - ①東京都港区立芝小学校
    - ②東京都世田谷区立多聞小学校
    - ③埼玉県寄居町立男衾小学校
    - ④埼玉県大滝村立大滝小学校
  - 中学校—
    - ①東京都台東区立御徒町中学校
    - ②千葉県松戸市立旭町中学校

- ③埼玉県熊谷市富士見中学校  
④埼玉県大滝村立大滝中学校  
－高 校－  
①都立田園調布高校  
②都立田無工業高校  
③都立大田ろう学校  
④東学大付属高校  
⑤東学大付属高校大泉校舎（海外帰国子女）  
⑥早稲田実業高校  
－スポーツクラブ－  
①東京スイミングセンター  
②戸田市スポーツセンター  
③読売ベルディジュニア  
〔関西地区〕  
①大阪市立立葉小学校  
②京都市立藤森小学校  
③京都府立城陽市立西城陽中学校  
④茨木市立北中学校  
⑤奈良県立添上高校

#### 8 ) 研究協力者

水野 瞳子（東京学芸大学）  
深沢 宏美（東京学芸大学）  
安田 彩子（東京学芸大学）  
森 美佐紀（奈良女子大学）

嶋 香織（奈良女子大学）

#### 9 ) 調査協力者

坂本喜久子（港区立芝小学校）  
小幡 則彦（世田谷区立多聞小学校）  
中村政一郎（寄居町立男衾小学校）  
若林 進（大滝村立大滝小学校）  
池田 熙（台東区立御徒町小学校）  
小神野 透（熊谷市立富士見中学校）  
山口 泰由（松戸市立旭町中学校）  
新井美喜男（大滝村立大滝中学校）  
伊藤 明則（都立田園調布高校）  
土器薗 進（都立田無工業高校）  
佐藤 俊夫（東学大付属高校）  
近 健造（早稲田実業高校）  
北村 直通（大阪市立立葉小学校）  
森脇 逸朗（京都市立藤森小学校）  
杉岡 義次（城陽市立西城陽中学校）  
伊達 真理（茨木市立北中学校）  
浦久保 繁（奈良県立添上高校）  
宮城 康次（東京スイミングセンター）  
菅原たか子（戸田市スポーツセンター）  
小川 章（読売ベルディジュニア）

（嘉戸 優）

## 2. 調査の結果・考察

### [関東地区] 1) 小学生

#### S F型—学校内外クラブ参加型

##### 1. 6年男子＜野球＞

「野球・柔道・そろばん・学習塾にと多忙な選手」(東京近郊新興住宅地域)

日常生活ではスケジュールが立て込んでいる割合には、その合間にねって友達とも外遊びするなどバイタリティに溢れている。構成メンバー20人程度の地域を中心とした野球チームに所属し、一週間に2回、一回あたり3時間の練習を土・日に学校の校庭を使用して練習している。それ以外のスポーツ活動は火・木は柔道に、月・水・土はそろばん、金・土は学習塾へと通っている多忙な少年である。

野球クラブでは、監督・コーチ、保護者からキャプテンとして期待をかけられるだけでなく、仲間からの信頼も厚い。いずれも今後野球を継続して欲しいと願われている。本人も野球を続けたいし、できることならプロを目指したいという気持ちをもつ。

学校では、ソフトベースクラブ、サッカークラブ、フットボールクラブに入って活躍している。友達や保護者、先生との会話の主なものは、スポーツに関するものであり、情報源となるものにテレビ、新聞、雑誌、両親からの情報と多彩である。

家族のスポーツへの関与を見ると、父親は野球、母親は陸上競技、姉はテニスとスポーツ一家であり、スポーツへの関心も高い。

#### コメント

スポーツをやったことによるメリット（新しい友人ができた、体力がついた、運動が好きになったなどといったプラスの評価）がある反面、デメリット（友達と予定が合わない、ケガが増える）も認識しており、自己の行動に対して積極性、自主性、主体性が見られ、物事に対して前向きであ

る。本人のパーソナリティ、運動能力、そして信頼できる指導者、保護者の期待と後押し、仲間の信頼といった人間関係の相互作用によりスポーツ生活が支えられている一例である。

##### 2. 6年男子＜野球＞

「公園や広場が練習場—管理人さんごめんなさい」(都心ビジネス街)

10～15人ぐらいで組織されている野球のチームに属している。構成メンバーの年齢は、8～14才であり、週に2回、1回の練習時間は5～8時間で公園や広場が練習場となる。通常、公園では野球の練習が禁止されているため、本来なら練習は厳禁の場所を使いなぜか練習ができてしまう。この秘密は、管理人さんが登場すると叱られるため練習は一時中断、管理人の姿が見えなくなるとまた始めるといったようなスリルとサスペンスに満ちた練習が使用する場所によって行われるのである。當時この様なことを繰り返しているとは限らないが、都心のビジネス街にすむ小中学生にとり、練習場所の確保ができなければ指をくわえていなければならない。窮余の一策というか、生活の知恵といえよう。

野球のほかに剣道を週に2回（火・金）、学習塾が週3回（月・水・金）、テレビゲームができるのは、火・水・木の3日のみである。

#### コメント

学校外でのスポーツ活動は、企業以外に児童・生徒の保護者が監督やコーチをボランティアとして週末に指導に当たっていることが多い。コーチングスタッフの中で問題になるのは、指導内容、指導方法に加えて、活動場所の確保である。子ども会、スポーツ少年団の活動場所は、地域の小学校の開放している校庭であることが多いが、今回の場合、都心のビジネス街にあるといった地域的

特性、小規模校といった学校の特色から、学校の校庭が野球をするには狭いので使用できない。児童・生徒の学校外のスポーツ活動が円滑に行われるためには、社会教育ではどのような受皿を用意していくかなければならないのかということについて早急に検討されることが必要である。

#### IF—体育の授業や体育的行事積極的参加型

##### 3. 小6年女子＜屋外運動クラブ（授業時間内）＞

「授業内クラブはスポーツへの欲求の解消となりうるか」（東京近郊山間部）

屋外運動クラブという名称の授業内クラブでは、サッカー・バスケットボール・野球を4～6年生までの総勢20名で実施している。週1回、1回45分という活動日数、実施時間に対する満足度は低く、指導者の期待度は全くないうといふ回答から指導者の教師とのコミュニケーションが薄い。運動・スポーツは大好きであって、昼休みや放課後は時間さえあればサッカーやバスケットで遊ぶ。ただ、居住している所が学校より遠く、スクールバスの送迎時間の関係から放課後の居残り（友達との外遊び）ができない。帰宅後は近くに友達がないため一人で、自宅の庭で遊びことになり、友達とスポーツをするといった欲求が充足されない。特に、第二土曜日は一人で運動・スポーツを行っているが、友達と一緒に遊びたいと切に望んでいる。中学校に入学したら、サッカー・バスケット、剣道をやりたいという希望をもつが、進学する中学校には女子のそれらのクラブがないので現在考慮中であるといふ。

山間部の過疎の村で都会とは異なり様々な制約が入ってくる。学校から30キロ近く離れた所に1～2家族といったように広範囲にわたり児童・生徒が居住しているため、村が彼らのためにスクールバスを配車している。よって最初に時間的な制約が生ずる。その合間にぬって友達と遊ぶという工夫をしているのもそれには限界がある。地域にはサッカーのチームが学校を核に行われているが男子中心であるため、女子の参加が難しい。ただ、テレビの影響も大きく、サッカーのJリーグは話題の中心である。女子でもサッカーボールを所有している場合が多く、外遊びとしても男女混ざり

合ってサッカーをしている。この様な中での女の子のスポーツ活動の充足を図るために方法が検討されなければならない。

#### 4. 小6年男子＜科学クラブ＞

「中学へ入ったら剣道をやるんだ」（都心ビジネス街）

体育もスポーツも大好きであるのに、受験のためひたすら我慢し、中学校へ入った暁には、晴れてかねてから面白うだと思っていた剣道部に入ろうと心待ちにしている卒業を間近に控えた6年生である。地域のスポーツクラブ（サッカー・野球）は練習が厳しいといって敬遠し、文化系のクラブ（科学・コンピューター・科学）に身を置いていた。

合格した中学校は男子校であり、中学校の部活動はまたそれなりの厳しさをもつていてことについての情報がないせいか、受験の重しがとれたことによって興味・関心のある剣道に注目している。

学習塾は3年生（週2回）から6年生（週3回）までの3年間にわたり定期を持って通ったといふ。学習塾の開始時刻が17時ということから、夕飯を済ましてでていったそうである。帰宅後の外遊びをしなかった理由の一つは受験があったことと、下校時刻までは友達と遊ぶためといふ。幼児体操教室に4才から6才まで、7才から9才までスイミングスクールという経験をもつ。家族のスポーツへの関与の仕方を見ると、父親は柔道と山スキー、母親はスキー・マラソン・水泳、中2の姉はバスケットといったように絶えずスポーツを行つており関心の程度も高い。

#### コ メ ン ト

受験という重圧から解放され、ようやく好きな事ができる機会に巡り合おうとしている。将来の夢や希望で満たされているところに、水を差すのはしのびないが、本人の期待度が高ければ高いほど現実とのギャップを感じてしまうことが多い。運動やスポーツをすることが好きな少年であるから、多少の障害も乗り越えていくことができるであろうが、重圧の反動が期待に応えられないような状況に陥らないように、プラスに方向づけられ

たらと思わずにはいられない。

#### N型－運動消極的参加型

##### 5. 小5男子＜理科工作（授業内）＞

「スポーツは苦手でも野球選手になりたい」（東京近郊新興住宅地）

日常のスポーツ活動は学校の昼休みに友達と6人ぐらいでバスケットたまにやる程度であり、休み時間は教室内で絵を描いていることが多い。下校後も通学距離が長い（徒歩50分）こと、近所に友達がいないため外で遊ぶ事ができない。小学校1年時より習字を習い、優級であるという。スポーツは、「する」とより「みる」との方が好きであり、サッカーをテレビでよく見ている。運動やスポーツすることは、体力がつくと思っているが、敢えてクラブに入らないのは、スポーツが苦手であり、自信がない。また、入っても選手になれそうもないという理由を述べていた。特に、運動・スポーツをする時に一番困るのは、サッカーなどでどこにパスを出していいかわからなくなったり、次の動きをどうしていいのか決められないという。それでも中学に入ったら野球選手になりたいという希望がある。陸上競技、水泳、器械運動はできることが少ないので嫌いな種目であり、球技は友達と一緒にやれることから好きな種目であるとしている。

家族のスポーツへの関心は、見るスポーツとして「相撲」がある。かつて父親は野球をやっていましたことがあり、父親とのスポーツに関する会話も野球についてであるという。

#### コメント

運動やスポーツが不得意のものであると思っている児童・生徒でも、心のどこかでは巧くなりたい、できるようになって自信をつけたいと望んでいる。スポーツをやる場所があっても仲間が周囲にいるかいないかで、スポーツ行動が変ってしまう。物理的条件の改善は早急にできなくも、遊びの中からダイナミックな活動へと移行できるようなプログラムを授業や、学校生活の中で味わえるような工夫が今後望まれるのかもしれない。

##### 6. 小6年男子＜工作クラブ（授業内）＞

「汗をかくのが嫌いー早く家へ帰ってパソコンがやりたい」（都心ビジネス街）

小学校に入る前からスイミングスクールに通い一時中断、小2年から4年まで水泳が不得意だったから再度スイミングスクールへ。4年になったら受験の準備に入る事もあり、面倒くさくなったらこれを機に辞めた。運動・スポーツは苦手だから嫌い、体育は授業の開始時に準備運動として校庭を10周走らされるから嫌い。そのわりには、空いた時間友達と8人ぐらいで商店街で自転車レースをしたり、カンケリして遊ぶこともあるが、どちらかといえばパソコンの前がよいという。運動することは、気分転換になるし、楽しいことをも知っている。それにもかかわらずスポーツを嫌うのは、やはり一緒に遊べる友達が近所にいないことが影響しているよう。現状では将来もスポーツに関わる気持ちはないという。将来の希望は、コンピューターに係わる仕事、ゲームソフトの製作になりたいという。とにかく今は授業が終わったら一刻も早く帰宅したい。眠りたい。コンピューターをやりたいという少年である。

#### コメント

毎日2時間以上、食前食後にファミコンをやっている。したがって就寝時刻は毎日23時、週末は24時であり、起床時刻は6時30分であれば睡眠不足を感じるのもしかたがないことであろう。都市化が進み睡眠時間が減少傾向にある現代人－日本人であるが、小学校の段階からこのような形態をとればますます睡眠不足感にさいなまれてくるであろう。

中高年の疾病予防に際して、サーフィンやアーティズムにあえて逆らわない規則正しい生活とバランスの取れた食事、そして適度な運動が強調されるが、その予備軍となる青少年のライフスタイルの偏りが現状ではどの程度見られるのか研究する必要があるのでないだろうか。

(加藤爽子)

## 2) 中 学 生

### F型—校内外スポーツクラブ積極的参加型

#### 1. 中1男子＜陸上・長距離＞

「隠れた才能がコーチの助言で開花した場合」  
(東京近郊ベッドタウン)

毎日が規則正しく、部活動（陸上）中心の生活を送っている1年生である。陸上部の練習は週6日、1回あたり2時間程度の練習をこなす。練習内容、練習時間、練習回数などについても冷静に分析し、シーズン中の走り込みが多少不足気味であることを指摘する。小学校時には、サッカー少年であり対抗試合などに参加した経験から、中学校入学後サッカーチームか陸上部かと思案していた。陸上部に仮入部したところ、通信大会でよい成績を収めたことから、顧問や親に勧められ、また自分の実力を試したいと思ったのが陸上部に入るきっかけとなった。

顧問教師クラブの仲間などからの期待は大きく、本人もそれに応えようと努力している一例として、将来全国大会（全中大会）への出場を目指す。したがって本人は現在の部活動についての悩みは全くなく、部活動に対しても①新しい友人ができる、②体力がついた、③実績が目に見えるからよいというプラスの評価をもつ。大学に進学しても陸上競技を継続したいと考えている。部の仲間うちでは1年生の責任者であるだけでなく、次年度には、陸上部の主将としてリーダーシップを発揮したいと思っている。顧問教師、仲間、保護者との人間関係もスムーズでありすべてに順風満帆である。

#### コ メ ン ト

すべてに前向き、積極的な対応が見られ、行動力のあるスポーツ少年である。部の仲間と部で購入した陸上競技マガジンなどを読み、効果的な練習方法などの研究に余念がない。周囲の期待に応えようと一生懸命努力し、それが現状では報われ、何の疑問も抱かずに部活動に専念しているについては多少気になる。今後、身長や体重の増加に伴い、競技成績も同様に伸長すればよいが、時

としては、必ずしも正の直線を描くとは限らない。挫折を知らない少年が、成長発達に伴い遭遇するトラブルに対して、このような時こそ持ち前のバイタリティで問題を乗り越えられることを願いたい。

#### 2. 中2女子＜剣道初段＞

「努力達成型の生徒の悩み」(東京近郊ベッドタウン)

指導者、保護者、仲間からの役割期待は高く、それに応えリーダーシップをとり部をまとめながら競技成績も上げている努力型の女子である。スポーツを行う際の悩みは、貧血のため練習が辛いことに加え、帰宅後は勉強のために就寝時間が24時近くなることでスポーツと勉強との両立難を訴える。また、自己の技術向上に関わる要素として顧問の技能レベルに対する低い信頼度をあげる。それは、①友達がやるのを見て、②カッコよさそう、③面白そうということで始めた剣道ではあるが、入部後は地道な努力の結果学校の練習だけで初段を取得、かつ県大会でベスト16になるなど成果を上げている。さらに上達への望みと、顧問の技量にズレを感じている。中学入学後、テニスか剣道かに迷い、また吹奏楽部へも憧れた中で選択した剣道部であるが、高校進学後は剣道の練習のハードさ、貧血があること、一応剣道の技術もある程度の水準まで達したことで剣道を続ける気持ちが失せている。小学校時には、地域の子ども会主体のフットベース、ソフトテニス、バスケットクラブに属し、一方で水泳が不得意、そして母の勧めでスイミングスクールに通い最上級を獲得したという努力型、完全遂行型のスポーツ歴をもつ。

#### コ メ ン ト

周囲の期待度は高く、かつ本人もその期待に応えるべく努力し、その努力が実った時に、生徒がさらに進んだ技術を習得したいと望み、顧問に技術を伸ばして貰えるのではないかという期待感や本人の欲求に応じて貰えない場合、顧問の技術レ

ベルや指導技術に対して不満を抱く。その結果せっかく上達したスポーツ（剣道）を継続しようという気持ちは失せてしまう。日常の練習内容への不満よりも、顧問への不満が生徒の中に生じたケースである。

#### S F型一校内クラブ活動参加型

##### 3. 中2女子<バレー部>

「活動できる運動部が制限されていることによる不満」（東京近郊山間部）

自分自身が指導者、保護者、仲間からどのように思われているかわからぬいためか、周囲の自分に対する役割期待は低いと本人は思い込み、いつかは周囲に認めてもらいたいという欲求をもつ。本人は、顧問教師の好きな面と嫌いな面をはっきりもち、その人間関係は良好であると述べているが、どこかに無理があるように見受けられるのは役割期待への不満が見られるからであろう。バレー部では副部長であるが、自己の技術やリーダーとしての資質が正当に評価されていないという感じを絶えず心のどこかにもつ。運動・スポーツすることでの悩みは、絵を画く、音楽を聴くなどといった好きなこと、他にやりたいことがあるにもかかわらず、毎日練習が忙しいのでできないという。帰宅後の生活は、時間の使い方に計画性がなく、気の向くままにいろいろなことに手をだし、そのしわ寄せが睡眠時間を圧迫していた。バレー部に入部した動機は、①本人は剣道をやりたかったにもかかわらず、入部できる女子の部活動はバレー部しかなかったことへの不満がある。スポーツや体育の授業もあまり好きではないという。今はバレーが好きになったというが、高校進学後剣道を再開しようと思っている。家族のスポーツへの関わりを見ると、父親・兄ともに剣道を続けており剣道への関心は強い。

#### コメント

小学校時に面倒くさくなってしまったはずの剣道であったが、中学校入学後本人の望む剣道部への入部は学校の事情で入部できなかつたことへの不満が見られる。また、バレー部内での顧問や仲間との人間関係において、自分の努力が正当に認

められない、評価されていないと感ずると、剣道への思い入れが強くなり、周囲との関係がマイナスに働くことになる。

#### 4. 中2男子<サッカー>

「技術よりチームワークという副部長としての役割期待」（東京近郊ベッドタウン）

部活動が生活の中心をしめ、かつリズムのある生活をしている。周囲の本人に対する期待の内容も技術的な面より監督やコーチはチームワークや部のまとまりを、保護者は良いプレーを期待しており、本人も副部長としてそれに応えようと努力している。本人は技術指向でありながらもチームの仲間の「サッカーが好き」「やる気」を大切にし、皆の気持ちが一体化できるようなチーム作り、チームワークを大切にすることを第一に考えていることからも明らかである。

本人は体力、運動能力については、すぐにうまくできることなどからあまり自信がなく、技術的な面からプロは無理だからアマチュアという形でサッカーを将来も続けたいと思っている。趣味もサッカー、会話の内容もサッカー、テレビ、雑誌もサッカーといったサッカー中心の生活であるものの、受験のこともあり週3回学習塾へ通っている。第二土曜日は学校の規則で部活禁止になっているが、一週間の疲れがたまっているせいか外出せずに休養しているわりには、通常通りの部活をやりたいという希望をもつ。家族のスポーツへの関与を見ると、父親はかつてマラソンを、兄は現在サッカーをやっており、母親とは部活やサッカーのことを話すといったことから、スポーツへの関心も高い。

#### コメント

部活に、宿題に、時間に追われていると感じている毎日の生活ではあるが、疲れていてもサッカーだけは止められない。受験のための学習塾へ通うためか家庭での学習時間は毎日1時間程度しかない。副部長としてチームのためにという姿勢は微笑ましいが、自分を殺しそぎてはいないであろうか。日常の疲れから、第二土曜日には外出もせず家で休養しているという裏に、副部長という役

割への精神的な疲労もプラスされていないか。

ゲームにおけるポジションもスイパーであるというなら尚更かもしれない。

#### I F型—運動部でないが体育的行事や体育の授業に積極的参加型

##### 5. 中3女子＜理科部音高志望＞

「運動部ではないがスポーツ大好き人間」(都心商業地域)

部活は運動部ではないが、昼休みなど時間があると友達とバレーボールをするという。本人は音高志望のため部活の時間はピアノの練習に当たざるを得ない。運動・スポーツは、楽しい、運動すれば上手になる、気分転換などプラスの評価をしており、体育は一番好きな教科である。運動・スポーツ歴をみると、小学校以前から5年生までスイミングスクールに通い、小学校時には区の連合体育大会の800m走で2位という記録をもつ。水泳を止めたのは、中学生になったら忙しくなると思ったからであるといい、一時は水泳部にも席を置くが(中2)，進路の関係から文化部に属している。スポーツに関する会話は家族や友達と盛んに行われており、その内容もサッカー(ヴェルディ)、バレーボールであるという。父親は市民マラソン大会への参加があり、弟はテニスと家族はスポーツへ何らかの形で関わっており、関心の程度も高い。高校に入学したら本人は硬式テニスをやろうと思っている。

##### コメント

都心の商業地域にある校庭の狭い学校に在学している生徒達は、お互いにエリアシェアリングをしながら運動・スポーツを行っている。進路の関係からどうしても運動部には入れないが運動大好き、空いた時間は友達とスポーツを楽しもうとする姿勢が回答の端々から伺える生徒のために、何等かの方策は考慮できないだろうか。コートや体育館などの運動・スポーツ施設は、放課後は部活の専用であり、一般の生徒は昼休みや早朝しか使用できない。校庭が狭い学校では、一般の生徒でもうまく放課後に使用できる施設、設備、器具・用具、時間帯などを考えてもよいのではないか。

#### 6. 中1女子＜コンピューター＞

「生徒会役員として陰ながらのバックアップ」(東京近郊新興住宅地域)

生徒会の書記であり、週4日はコンピューター部の活動に専念している。スポーツをする以上に小6から始めたコンピューターに魅せられている。また、学校では入りたい運動部(バトミントン)がないために運動部に入っていない。喘息がきっかけで5~7才まで区内にある私企業のスイミングクラブに通っていたが、引っ越しを契機に止めたという。下校後のスケジュールを見ると、家庭では毎日3~4時間の学習が習慣的に行われ、したがって成績も良い。休日も読書やファミコンに費やしている。

しかし、運動・スポーツ、体育の授業は好きである。喘息があるため走ると苦しくなることがあるが、喘息の影響は加齢とともに減少している。実際に運動することより見ることの方が好きであり、体育の授業や体育的行事には積極的参加が見られる。特に体育祭などでは生徒会の役員の一員として、体育委員会の手助けをしている。

家族のスポーツへの関与の状況は、父親はかつて学生時代にバスケットを、母親は現在テニスをやっており、家庭でもテレビのスポーツ番組の視聴やそれに関する会話もみられ、スポーツへの関心も低くない。高校進学後は、好きなバトミントン部があればぜひ入部したいと考えている。

##### コメント

現在、運動するよりは、興味・関心の対象がコンピューターであり、プログラミングをしたりソフトを作成しようと研究しているが決していわゆる「オタク」ではない。学校における運動部の活動の限界(施設、設備、指導者、その他)はどこも否めない。また、内申書の関係からどこかの部に属していたほうがよいというが、放課後に行われる特別教育活動での部活動は、開設できる種目が制限されざるをえない。そのような場合に、社会教育の中に受皿があれば、たとえ週1回でも生徒の運動欲求が少しでも満足させることができるのではないであろうか。

## N型－運動消極的参加型

### 1. 中1男子＜パソコン＞

「今は文化部だけど高校入学後はバスケットをやるつもりのスポーツ苦手少年」(東京近郊ベッドタウン)

文化部（パソコン）に所属、昼夜休み、放課後にもほとんどスポーツを行っていない。その理由は、まず苦手であり、塾・習い事などで忙しいという。スポーツを行う場所は、下校後訪れる児童館で、3人の友達とそこで卓球をしたりバスケットをするそうである。

運動・スポーツをする際の悩みは、技術面（下手）を強調していた。運動・スポーツをすることはかえって好きである。運動をすれば運動が上手になるし、気分転換や健康によいとも思っている。運動・スポーツ歴を見ると、小学校3～4年の2年間はスイミングスクールに通った経験をもつが、あまり面白くなかったということで辞めている。それ以外のスポーツ歴はない。小学校の時から、VTR研究、電気工作、科学クラブと一緒にして文科系のクラブに属していた。家族のスポーツへの関わりを見ると、母親は学生時代バスケットをやっており、妹は水泳をやっていることからスポーツへの関心もなくはない。

### コメント

本人が在学している中学校は、陸上競技やバレーボールが強いので県下では有名高・名門高である。校庭も体育館も中学校としては広く、運動部は各部とも部室を有している。公立中学校であるから、学区域の生徒を当然抱えるが、運動・スポーツの名門校であるとどうしても選手やクラブに目がいきがちである。そのような中で、運動・スポーツは不得意であり、できるスポーツは少ないという生徒は小数派に属する。このような生徒でも高校に入学したらバスケットをやろうという希望をもつ。このような生徒が意を決してスポーツ行動を起こそうとしている機会を指導者は的確に把握していくことが重要である。このような生徒のスポーツ活動の場に学童クラブの存在があることを考慮しておく必要がある。

### 8. 中3男子＜パソコン 英語検定＞

「小さい頃からの習い事のめじろ押しが無気力を招いた例」(都心商業地域)

部活は文化部に所属、スポーツや運動はほとんど行っていない理由に、毎日の学習塾通いと習い事（家庭教師）で忙しく、何となくスポーツする気が起らないという。生活歴を見ると、小学校入学以前からピアノ（3才～現在まで）、書道（同様）、体操（幼稚園～3年生）、学習塾（小1～現在）、水泳（スイミングスクール 中1～現在）と絶え間なく習い事に忙殺されており、帰宅後は「疲れた」を連発し何もしたくないという。スポーツをすることは好きであるが、どちらかといえば水泳、持久走と一人で黙々と運動するのが好きである。家族のスポーツへの関わりは、父親は学生時代に野球をやっていたことから、野球の話が共通の話題になる。母親は、スポーツよりは勉強と口うるさい。弟達には、母親の関心が薄く、かえってのびのびと好きなスポーツをやっており好成績を残しているという。したがって家族のスポーツへの関心は高い。本人は今後も水泳は続けたいと思っているが、高校に入学したらアルバイトや好きなことをすることが夢である。

保護者の長男に対する期待度の高さから、次々と習い事をさせてきたようであるが、現状では中途半端なもので終わってしまいそうな気配が濃厚である。あまり手をかけなかった次男がトライアスロンで好成績なのは対照的である。

### コメント

二言めには「疲れた」を連発する中学生の場合には、どこかで生活の内容の見直しをはかってやる必要があろう。面接時に、彼がスポーツをしたり、学校生活等での仲間の存在がほとんど見えてなかっただ。孤独に浸りながらスポーツを行うのもよいが、スポーツのもつ要素をうまく機能させるには、一緒にやる仲間の存在が大きい。このことに彼が気付けば、スポーツのまた異なった楽しみ方ができ、生活の幅が広がるのではないだろうか。

(加藤爽子)

## 2) 高 校 生

F型「目標は全国大会出場、でも競技生活は高校まで」

### 1. 都内私立大学附属高等学校1年男子＜バレー ボール部＞

(都内住宅地域在住)

中学からバレーボールを始め、中学時代には東京選抜として国際レベルの大会に出場するという経験を持つ。高校に入ってからも1年生ながら中心レギュラーであり、指導者(教員、コーチ)、部員からエースとして活躍することを期待されている。そして、中学時代の東京選抜の仲間達には負けたくないということから全国大会に出場することを目標としており、親からも実績を残して欲しいと励まされている。また、中心選手としての役割を果たすと同時に周りの部員(例:ボール拾い)にも気を使い、ゲーム場面においてはムードメーカーとしての役割も果たしている。バレーボールというスポーツが自分に一番向いているということが発見できたことに喜びを見いだしており、そういう自分に自信を持っているが、バレーボール中心の生活に忙しさを感じている。高校ではもう少しゆとりがあると思っていたら、実際は休みのない毎日の練習が続き、それは遊び時間を拘束し、勉強時間を減少させている。高校卒業後は上の大学に進学することを希望しており、大学ではバレーボールはおこなわずに遊びたいと考えている。

### コ メ ン ト

高いレベルの競技成績を残したという意欲を持っている反面、競技生活は高校までと考えている背景にはバレーボール以外にしたいこと(勉強、遊び)が制約されている現在の生活があると考えられる。競技レベルの高いところで活動する高校生が他にやりたいことを後回しにすることは彼自身の高校生活の充実度、将来のスポーツ参加の継続にとって果して有益な方策であろうか?

F型「勉強とスポーツは両立できる」

### 2. 都内国立大学附属高校1年男子＜陸上部部長＞

(都外新興住宅地域在住)

小学校高学年から授業時間内のクラブ活動で陸上クラブに所属し、中学時代は全国大会で800mで優勝、高校でも国体準決勝進出という経歴を持つ。数多くの陸上大会に参加することで他の学校の生徒と知り合えることに価値を見いだしている。中学までは地元の公立学校に通学していたが、塾の先生に勧められ、現在通学している有名進学高校を受験し、合格した。自宅から学校までの通学時間は1時間40分かかり、忙しいと感じているが、陸上部の週4回の練習以外の日にも自宅近くの公園などでトレーニングを行っており、まったく走らない週はないといっている。陸上を始めたきっかけは足が速かったからということであり、中学、高校の陸上部では指導者に恵まれ、よい成績をさめるようになった。陸上以外のスポーツ、特に球技系のスポーツは苦手であるが、することは好きであり、サッカーに興味を持っている。本人はこれからも記録が伸びるだろうということを確信しており、高校卒業後も大学で陸上を続け、自分の限界に挑戦したいと考えているが、陸上の強い大学に進学したいとは考えておらず、まだ決まっていないが自分がつきたい職業との関係から希望大学を選びたいといっている。社会人になってからは趣味として走り続けたいという希望を持っている。

### コ メ ン ト

競技レベルの高いところで活動しているにも関わらず、陸上一辺倒になっておらず、競技生活と他の生活(勉強)との切り替えが非常にスムーズにいっている。また、一つの種目に秀でていることにより、他のスポーツ種目も苦手ながらも意欲的に取り組んでいるという姿勢がうかがえる。

## S F型「スポーツ大好き！でもあくまでも趣味」

### 3. 都立普通高校 1年女子＜バスケットボール部＞ (都区内住宅地域在住)

小さい時から体を動かすのが好きで、両親の影響から小学校4年から6年までテニススクールに通ったり、小学校6年の時には地域のバレーボールクラブに所属していた。中学校でもバレーボール部に入ろうと思っていたが、バレーボールとしていた同学年の生徒と一緒にやるのが嫌だったことと、ブルマをはかなくてはいけないということで、全身運動のスポーツで、多くの友達が参加しているバスケットボール部に入った。クラブは、顧問が名前だけの顧問であり、先輩達が引き継いでいた非科学的な練習をおこなっており、練習には多少の不満があったが、友達と一緒にできるということと、ゲームが楽しいということで、チームとしては強くはなかったが、持ち前の運動能力の良さから1年の時からレギュラーとして活躍した。高校に入ってからもバスケットボール部に入ることは前から決めており、現在ではレギュラーとしては活躍していないが、部全体の雰囲気には大変満足している。日常会話において友達とバスケットボールだけでなくサッカーや相撲について話をすることが多く、家庭でもスポーツについての会話こそ少ないが、両親ともテニスをおこなっていたりするなどスポーツに積極的に関わることができるのである。しかし、スポーツをすることはあくまでも趣味の一つであり、勉強や家事などとの両立は当たり前であるとしつけられており、本人も両立には何ら苦痛はないといっている。現在はバスケットボール部でレギュラーを取ることを目標として熱心に活動しているが、自分のもつバスケットボールの技能の限界をわきまえており、高校卒業後は友達を多くつくりたいという理由から、バスケットボールにこだわらずスポーツを続けていきたいと考えている。

### コメント

小学校から中学校に進学するときに消極的な理由によりスポーツ種目を変えても継続してスポーツに打ち込むことができたり、将来は一つのス

ポーツ種目にこだわらずにスポーツをやっていきたいという発言は、とにかくスポーツが好きであるという価値観が基盤にあるためであると考えられる。また、スポーツと勉強、家事との両立は当たり前だと思っているという考えは、将来の生活の中にスポーツを組み入れることを容易にするであろう。

## S F型「部活は嫌だけど体を鍛えたい」

### 4. 都内私立大学附属高等学校 1年男子＜空手道場＞ (東京近郊住宅地域在住)

小学校時代にいとこに誘われて地域のクラブで剣道をおこなっていた。現在の学校は中学から通っており、入学後剣道部に仮入部した。しかし、練習を2、3日休んだということで先輩から特別練習（しごき？）を与えられ、それが嫌で剣道部は退部し、陸上部に入った。しかし、陸上部の練習は施設の面から学校以外の場所で不定期に練習していたため、それが嫌で中学2年時に退部した。その後教師からスポーツをしたほうが良いと勧められ、町の道場で空手を始め、現在も週2、3回程度通っている。さらに中学3年から空手のトレーニングとしてフィットネスクラブにも通っており、費用がかかることに問題はあるものの、体力が増進したり、大人の人と交流が持てるなどの価値を見いだしている。現在ではみるスポーツにも興味を持っており、Jリーグの地元チームの試合にはサポーターと一緒に観戦することがあり、応援をするときの雰囲気に楽しさを感じている。本人はスポーツをすることについては体を鍛えるためだという意味付けをしており、今後も体のためにスポーツは続けたいと考えていると同時に、流行スポーツ（スキーバイブィング、ローラーブレード）にも挑戦したいと考えている。

### コメント

学校の部活において否定的な経験があったにも関わらず、学校外でうまくスポーツに参加している。現在では「体を鍛えるため」というスポーツ観を持っているが、みるスポーツ、流行スポーツに興味を持ち始めているという背景にあるメディ

アの影響は、彼の今後のスポーツ観を変容させるかもしれない。

### I F型「草スポーツ」高校編

#### 5. 都立工業高等学校 2年男子

(都内市部住宅地域在住)

中学時代に野球部に所属していたが、練習中に鉄柱に激突して膝蓋骨を骨折し退部した。高校に入ってからは運動部には所属せず、生徒会(毎日)と演劇部(週1回)に所属している。学校では休み時間にスポーツをおこなうことはあまりないが、夜になると毎日のように中学時代の同級生と地元で集まり、野球、サッカー、ラグビーをしたり、自転車で地元を走り回っている。野球に関しては場所の確保が難しく、球場で練習をしている社会人のチームに試合を申し込んだり、車が入れないように操作して路上でおこなったりしている。また、社会人と野球の試合をするときは正規のルールを用いておこなうが、自分達だけで野球をおこなう場合には、場所、人数、目的に合わせてルールを変えながら遊んでいる。スポーツは下手ながらも好きであり、家庭でもスポーツについての会話が多い。しかし、どちらかといえば家にいることは少なく、平日の夜は先にあげたように仲間とスポーツをしたり、不定期にアルバイトをしたり、休日は一人で遠出をすることが多い。将来の進路希望があり、具体的な方策についてもはっきりしている。

#### コメント

場所、人数が不定であるが、気のあった仲間達とその場でスポーツをつくり変えて楽しんでいく、いわば「草スポーツ集団」はプレイとしてのスポーツの原点であろう。この集団のメンバー達は自分達のライフスタイルに合わせてスポーツをうまく取り込んでいく力を身につけていくであろう。ただ、いまある集団は彼らが社会人となり、時間的にも制約が生じたときには、制度化されて一つのクラブとして存続していくのであろうか、それともこの集団は崩壊してしまうのであろうか？

### I F型「スポーツは好きだが面倒くさい」

#### 6. 都立普通高校 1年男子

(都区内住宅地域在住)

小学校4年生から三重県で野球クラブに入った。平日は水曜日以外は毎日練習で、日曜日にはほとんど試合が入っていた。県大会には出場できなかったがわりとレベルの高いチームであり、本人はレギュラーとして活躍し、父親は試合の時審判をするなど家族も協力的であった。中学生になってから東京に引越し、通学した区立中学では野球部に所属した。野球部はそれほど強くはなかったが、週に5日練習し、本人はレギュラーとして活躍し、大会では逆転のヒットを打ってチームを勝利に導かせ、大変うれしかったという経験を持っている。中学3年の春に部を引退し、受験勉強と遊びの生活を経て高校に入学したが、入学当時は野球部に入ろうと思っていた。しかし、現在の高校の野球部は硬式野球であり、「硬いボールは恐い」というイメージがあるため、そして中学3年の春から野球をやっていないというブランクがあったため、入部しなかった。学校の休み時間にはひまつぶしとしてバーボンをしたり、体育の授業でも球技系のスポーツは好きだというが、それ以外にスポーツをいまさらしようとは思っていない。現在は「面倒くさい」ということで特別な活動はおこなっておらず、家と学校の往復を繰り返す生活である。充実した生活を過ごしているとは本人は思っていないが、何かをしたいとも考えていない。

#### コメント

小学校時代、中学校時代に野球をやっていたのにも関わらず、現在何もスポーツに参加していない要因は、彼自身の内向的な性格、そして中学での野球部引退後の何もしなかった生活経験であると考えられる。野球中心の生活からはなれ、何をしてよいかわからない、無気力な現在の状態を脱出させるための機会は、彼が過去に充実感を味わったことのあるスポーツであるかも知れない。

## N型「スポーツをしている人は遠くの世界の人！」

### 7. 都内国立大学附属高校 2年男子<天文部> (都外新興住宅地域在住)

小さい時から外で遊ぶことが少なく、スポーツは苦手で、小学校時代から体育の授業でうまくできないことを苦痛に感じていた。現在では体育の授業に出席すること自体も苦痛で、上手にスポーツをおこなっている人（生徒）が自分とは違った世界の人見えるという。学校の休み時間は図書館で読書をすることが多く、放課後は予備校に週3回通ったり、家で勉強するのがほとんどである。学校の天文部に所属しているが、とりあえず入っているということで、熱心に活動してはいない。将来は弁護士になることが希望で、そのために勉強（受験勉強）をすることで日々の生活は忙しく、暇があれば映画を見たり、旅行をしたりばーっとしたりしたいと考えている。家族の人のスポーツに対する関心も低く、本人は今後もスポーツをしないだろうと考えている。しかし、彼の生活の中にスポーツはあったのだ。小学校2年生からスマミングクラブに通っており、現在でもたまに泳いでいる。本人はクロールが得意だといっている。だが、彼にとって水泳はスポーツであるとは考えておらず、水泳以外のスポーツに対して嫌悪感を抱くのであった。

### コメント

スポーツに対する苦手意識、および受験勉強の忙しさが、彼からスポーツを遠ざけている。スポーツ苦手→スポーツ嫌い図式の典型的なパターンである。しかし、彼自身は自覚していないが、水泳をしているという立派なスポーツ生活があり、このあたりからのアプローチの仕方によって、ス

ポーツへの愛好的な態度が育成される可能性があると考えられる。

## N型「吹奏楽があるからスポーツはいらない」

### 8. 都立普通高校 1年女子<吹奏楽部> (都区内住宅地域在住)

幼稚園から中学3年までエレクトーン教室に通っており、また中学時代には吹奏楽部に所属し、現在高校でも吹奏楽部に所属するといった音楽大好き少女である。スポーツに対する取り組み方は消極的であり、体育の授業は「与えられたものは好き」という理由からわりと好きな方であるが、球技系のスポーツは苦手なので嫌いであり、器械運動は好きだという。スポーツをすると体が筋肉質になってしまふから嫌だというが、団結力がついてよいという考えを持っている。中学生の弟が現在学校のサッカー部に所属しており、家ではサッカーの試合をテレビでみたり、学校では友達とサッカー（Jリーグ）の話をしたりすることがあるなど、みるスポーツには興味を持っている。しかし、自分でスポーツをするという気持ちはまったくなく、週6回の吹奏楽部の活動を中心とした生活に満足しており、将来もスポーツをしなくても不自由はないだろうと考えている。

### コメント

音楽に楽しみを求めていることと、スポーツに対する苦手意識が彼女をスポーツをおこなう場から遠ざけている。自分のライフスタイルが確立されつつある高校期において、スポーツ以外の活動に価値を見いだしている人にスポーツ生活を位置づけていくにあたって、スポーツに対する苦手意識はマイナスに作用すると考えられよう。

（長見 真）

## 4) 海外帰国子女

### S F一校内クラブ参加型

#### 1. 高2女子<バスケット>

「目的意識をもってのスポーツ活動」

韓国・英国での在外経験7年9ヶ月を有し、毎日バスケットに明け、暮れている。クラブではレギュラー選手である。高体連の大会で2回戦へ勝ち進むことを目標に週5日の練習を行っているが、入部希望者は初心者が多いこと、5対5の攻防戦ができるだけのメンバーの確保など、絶えずクラブとしてはメンバーの確保のために悩みを抱えている。

両親、きょうだいともに学生時代は体育会に所属し、家庭では体育会のよさを耳にしていた。よってスポーツへの関心は高い。したがって、クラブ活動（バスケット部）に参加するのは、自然であった。帰国子女だけという学校のもつ雰囲気のせいか、あるいは上下関係が一般に比べて希薄であり、目的意識を持って入部し、全員が活動を支えているという認識、部への帰属感が強いといったように部活動に対する考え方、参加の仕方が一般的な学校とは多少異なる。

スポーツに対する考え方、「スポーツは楽しむためのものである。スポーツが好きだから練習するのであり、練習を重ねることでスポーツの面白さが増大する」とし、日常の練習の際には、①積極的に何事にも取り組む、②自分で上達しようという目的意識をもつことをモットーとして片道2時間の通学時間にもかかわらず、練習に取り組んでいる。

将来も何らかの形でスポーツを継続しようと思っているが、今後、大学ではプレーヤーとしては自信がないので、マネージャーとして、部をまた違った観点で見ながら、バスケットとの関わりを持つつもりであるという。

#### コメント

体力や運動能力の向上には、部活動の効果が大きいことも認識しており、運動場面ではバスケ

トだけでなく、器械運動や他の球技、スキーなどに積極的に取り組み、運動・スポーツを楽しんでいる。

スポーツをすることは自由であり、どのようなスポーツでも、横並びに平均的にできる必要性はなく、自分なりに、段階や目的に応じて楽しむことでよいという意識を有していた。これは、海外で育まれたスポーツに対する考え方の一例といえよう。

### I F一運動部ではないが体育的行事などへの積極的参加型

「スポーツは好き、体調との相談次第」（生徒会役員）

ドイツのギムナジウムに4年10ヶ月在学した経験をもち、そこでは週1回校内クラブでゲーム中心のバスケットを楽しんでいた。ドイツのギムナジウムでは、13時に授業が終了すると、一旦昼食のために帰宅し、14時30分にはクラブのために再度登校して活動。コーチはその学校の体育の教師であり、個人指導に徹していたそうである。

両親は、ともに帰国後もテニスを楽しんでいる。特に、父親はかつて国体の選手であったという。よってスポーツへの関心も高く、帰国までの間はよくスキーやキャンプを家族で楽しんだ経験を有する。

通学時間が長く、慣れない日本の生活から入学後、1ヶ月以上闘病生活を送らざるをえなかった状況から、部活動としてスポーツをすることは諦めている。バスケットボール、ハンドボール、テニスといったスポーツをすることは好きであるが、やりすぎると体調を崩すことがあることを自覚しているため、将来は趣味程度でテニスをやりたいと思っている。

#### コメント

体育の授業時には、陸上、体操、水泳などの苦手な種目はあるものの、そのような種目でさえも積極的に参加し、さらに、体育的行事、生徒会主

催の行事では生徒会役員として、リーダーシップを発揮している。

海外では、スポーツがごく自然に生活の中に入りこみ、休暇を家族で楽しむというライフスタイルを経験することで家族の凝集性が高まり、また

帰国後、家族が離散傾向のある日本型の休暇の過ごし方といった双方の点を折衷させながら家族でスポーツと関わっている。

(加藤爽子)

## 5) ろう学校生徒

### S F型「卓球を初めてから世界が変わった！」

#### 1. 都立ろう学校高等部 2年男子<卓球部部長> (都内旧住宅地域在住)

小学校まで普通学校に通い、中学からろう学校に入った。小学校時代は体力がなく、スポーツもうまくなく、家でテレビゲームばかりしていた。中学から入ったろう学校では、野球部か卓球部のどちらかに入ることが決まりとなっており、野球はみんなに迷惑をかけるからということで卓球部に入部した。卓球を始めるようになってから、体力もつき、他のスポーツにも積極的に取り組むようになり、スポーツが好きになった。それだけでなく、卓球をすることで集中力が身につき、それが勉強にも生かされ、学業成績も向上したという。高校は中学時代の卓球部の先輩達と一緒に卓球をやりたいということで現在の高校を選んだが、その先輩達は卓球部に所属していなかった。このことは多少残念な気がしたが、自分の卓球の実力を高めたいということから高校でも卓球部に所属した。卓球についての話をすることが多い、週4回の練習では足りないと感じており、休日などは障害者専用のスポーツセンターにいって中学時代の友達と卓球をしている。現在はどんな大会でもよいから優勝することを目標としており、高校卒業後も卓球は続けていきたいと考えている。

#### コメント

強制的にせよ、中学から卓球を始めたことがすべてにおいて肯定的な影響を及ぼしている。卓球は聴覚障害者の中では人気があり、制度的にも整っているという点で今後も継続できやすいスポーツ種目である。

### S F型「中学時代にいろいろなスポーツをしてよかった」

#### 2. 都立ろう学校高等部 2年女子<バレー部> (都外住宅地域在住)

小学校からろう学校に通っている。小学校の時には健聴者の友達に勧められてスイミングスクールに通っていたが、スポーツはあまり好きではなかった。中学では学校の方針で放課後など毎日のようにいろいろなスポーツをして、スポーツが好きになった。高校では先輩に勧められてバレーボール部をつくり、ろう学校の大会に出場し、エースとして活躍している。バレーボールはチームワークが大切であるということに魅力を感じており、活動中は他の部員にも気を使うことを心がけている。運動能力は比較的高く、バレーボール以外にも陸上の大会に出場している。また、休日などには健聴者の友達と地元でバスケットボールをして遊ぶことがあり、スポーツをする機会が多い。高校卒業後はデザイン関係の学校に進学することを希望しており、今後もバレーボールに限らずスポーツを続けていきたいと考えている。

#### コメント

中学時代に多くのスポーツを経験したことがスポーツに対して愛好的な態度を形成した大きな要因であるといえよう。このようなスポーツに対する愛好的な態度は、スポーツ活動を継続させる要因になるとともに、健聴者との交流の機会を持つことができる場をつくることができるということで、重要な意味をもつものと考えられよう。

### S F型「スポーツはしているけれど学校だけ！」

#### 3. 都立ろう学校高等部 2年男子<野球部> (都内市部新興住宅地域在住)

高校からろう学校に通い始める。小学校、中学校では学校の勉強についていけず、放課後は家で復習をする日々が続き、スポーツをすることはほとんどなかった。また、友達もあまりおらず、みんなで遊ぶことも少なかった。高校に入ってからは体を鍛えるためにスポーツをやろうと考えており、先輩に勧められて野球部に入部した。入部当初はうまくなかつたので練習は苦しかったが、今では満足して活動している。また、学校の休み時

間などには仲間とサッカーをして遊んだりして、スポーツを多くおこなっている。しかし、学校以外ではスポーツをすることはなく、家では一人でのんびりすることが多い。テレビのスポーツ番組をみることもあるが、家族の人とスポーツについての会話をすることはほとんどない。それどころか、家族の人は自分以外は健聴者なのでコミュニケーションが難しく、会話自体が少ないといっている。高校卒業後は大学に進学したいと希望しており、そこではスポーツはやりたいと思っているが、就職後は仕事が忙しいのでスポーツはしないだろうと考えている。

### コメント

普通学校の時には自らのハンディキャップから人より多くの勉強をしなければならなかった状況は多くの障害を招いている。ろう学校に入ってからスポーツとの関わりが多くなったが、そこでの関わりは学校だけである。このような状況においては、学校期以降のスポーツ活動が促進されるかどうかは疑問である。

### N型「バトミントンならやりたいけれど」

#### 4. 都立ろう学校高等部2年女子＜美術部＞

(都内市部住宅地域在住)

小学校、中学校とも普通学校に通っており、高校からろう学校に進学した。高校卒業後は美術関係の学校に進学したいと考えており、学校では美術部に在籍し、学校以外では絵画教室に通っている。中学1年の時に学校の部活動でバトミントンをおこなっていたが、体調が悪くなったり、練習相手がないなったことで途中でやめてしまった。高校に入学してから卓球部に入ったが、やはり体調が悪くなったり、勉強時間がすくなくなることからすぐにやめてしまった。激しいスポーツはあまり好きではなく、男子と一緒にスポーツをすることに恐怖心をもっている。現在は、スポーツをすることはほとんどなく、家では勉強、

読書、絵画をすることがほとんどである。ただ、本人は運動不足を感じており、親からも運動をすることを勧められるが、長続きしない。しかし、そういった中でもバトミントンは好きであり、やりたいと思っているが、学校にはクラブがないので非常に残念に思っている。高校卒業後は機会があればバトミントンをおこないたいと考えている。

### コメント

体が弱いことからスポーツに対する取り組みは消極的である。また、バトミントンをやりたいという欲求もそんなに強いというわけではない。しかし、現在ないし将来において、彼女を取り巻く環境の中にバトミントンをする機会があれば、スポーツに対する考え方、取り組み方を変容させる可能性があると考えられよう。

### まとめ

ろう学校という生徒数の少ない学校の中で行われるスポーツクラブ活動は、ろう学校だけのスポーツ大会（野球、陸上、バレーボール、卓球）との関係から、種目が制限されている。そのような状況においてもスポーツに魅力を感じて積極的に取り組んでいる生徒が存在するが、現状に不満を感じている生徒も存在する。このような、スポーツに対して積極的に関わるか否かの分かれ目は小学校、中学校時代のスポーツ経験であろう。特に、普通学校を経験した生徒達にとっては、そこでの学校生活は勉強に追いつくことが中心であり、また他の生徒との人間関係がうまくいかないことから、肯定的なスポーツ経験を有することが少ない。このように、聴覚障害者のスポーツ参加を促進させるためには、聴覚障害者の集団、ろう学校といった枠を越えたスポーツ環境を整備することが必要であるとともに、聴覚障害者自身が積極的にスポーツに取り組んでいこうとする態度を育成することが大切であると思われる。

(長貝 真)

## 6) スポーツクラブ所属者－小学生－

### トップをめざす子どもたち

～一流スポーツクラブ参加児童の面接調査から～

#### 1. はじめに

本節では、これまで多くの優秀な選手を輩出し、クラブ参加者の競技力向上をその中心的ねらいとするサッカー、水泳、体操クラブに参加する児童の、スポーツ参加とその背景を報告する。すなわち、典型的なフォーマル・スポーツに参加する児童の事例報告である。

面接は、それぞれのクラブごとに、まず調査協力者が抽出した競技力の高い、ないしはその志向を強く持つ小学校5～6年生12名に質問紙によるアンケート調査を行い、その中から協力者の意見を参考しながら半数の者を選び、実施した。本報告では、それぞれのクラブの被面接者の中から、特に典型的・特徴的な者を報告する。いずれも小学校6年生の12歳である。

#### 2. 面接調査の記録

##### (1) Jリーガーへの第一歩

～サッカークラブの子どもたち～

Jリーグに所属するクラブが設置する調査対象ジュニアチーム（12歳未満）は、火水金土の週4日、1日2時間半の練習を行い、日曜日には対外試合を行う。練習は、専用の施設で、専門のコーチが指導するが、個人でアップし、チームの中で組分けして、ゲーム中心に行われる。このジュニアチームには、30人程が所属しているが、彼らは厳しい選抜テストによって選ばれたエリート達である。

A君の場合……私立小学校から電車とバスで40～50分かけてクラブに通う彼は、練習や試合には欠かさず出席する。彼は身長が高く、また運動能力も高いことから、選手として監督からも大いに期待されている。彼は、練習や試合などの量に

ついては「ちょうどよい」と思っているが、人工芝での練習は「硬い」から好きではない。サッカーを始めたのは、テレビ等で興味を持ち、面白そうだったからである。このチームに入った理由は、「プロになるための一一番の近道」だと考え、したがって、「このチームだから」である。チームに入ったことで、両親も「わりに期待している」し、応援してくれていると思っている。プロになりたいのは、「有名になりたいから」である。チームに入って良かったことは、「親しい友達ができた」とと「精神力がついた」ことである。もちろん、サッカーが上手になったことは言うまでもない。しかし、「疲れて勉強ができない」という悩みもある（生活時間調査では、「勉強」は練習のない月・木曜日に家庭教師と2時間だけである）。いつも「眠い」感じがして、もっと睡眠時間を取りたいと思っている（平均睡眠時間8～8.5時間）。

彼は、スポーツが「とても好き」で、学校では「ソフトボールクラブ」に所属している。昼休み等もバスケットボールをしたり、サッカーもしたりしている。また、日曜日の午後に試合がないときなど、家の近くのスイミングで泳ぐこともある。でも、体育は、授業のやり方が面白くないから、「とても好き」とは言えない。

将来の希望は、ジュニアユース（15歳未満）、ユース（18歳未満）の選手としてこのクラブで頑張り、プロの選手になることである。

B君の場合……チームで副キャプテンを務める彼は、キックの正確さと運動量の多さから試合には常に登場し、監督には期待されている選手である。彼も、チームの活動日数や時間については「ちょうどよい」と思っているが、水曜日は練習を休み、習字と学習塾に通っている。クラブでの今の状態にはとても満足している。対外試合の選手は

監督が決めるが、もし選ばれなかつたら、もっともっと練習しようと思っている。

このクラブに入ったのは、母親に勧められて「スクール」に入会したのが始まりで、ジュニアに選ばれてからは、みんなもそうであるように、「有名選手になりたい」と思うようになった。チームに入つて良かったことは、「積極的になったこと」「体力がついたこと」等であるが、「サッカーがもっと好きになつたし、他のスポーツを見る目がついた」ことも挙げられる。入つて悪かったことは別になつと思う。

スポーツはするのも見るのも大好きで、学校では卓球クラブに入つてゐる。一番好きな教科も体育だし、昼休みにはバスケットボールをよくする。でもサッカーは足を蹴られるからしない。よく見るスポーツはサッカーだし、友達と話すことも、サッカーの雑誌などで知つことが多い。第2土曜日は学校が休みになつたけれど、私立の子もいるから、それに合わせて練習か試合が組まれる。自分としては、もっと練習したい。

中学に進んでも、このクラブのジュニアユースの選手になりたいけれど、ダメだったら部活でサッカーを続け、将来はプロの選手になりたいと思っている。

## (2) 夢はオリンピックの選手

### ～スイミングクラブの子どもたち～

これまで数多くの一流選手を輩出した名門スイミングクラブの“選手コース”に通う少女達の生活は、例外なく、「学校とスイミングだけ」の生活であると言つても過言ではない。ここでは、“選手コース”でもそのトップにいる女子選手を例にあげてみよう。

Cさんの場合……私は渋谷区の小学校から約1時間かけてここに通つています。練習は、月曜だけがお休みで、火曜日から土曜日までは毎日5時から3時間練習があり、日曜には8時から10時までと、1時から3時までの2度練習があります。第2土曜日等の学校がないときは、金曜から日曜まで合宿するときもあります。私はいつも高校生位までの人達30人位とクラブの施設で、陸上トレーニング1時間、水中基礎練習1時間、メイン練

習1時間の練習を、専門のコーチから指導されます。コーチはとても教え方が上手だと思います。私は練習はほとんど休みません。月曜日だけお休みというのはちょうど良いと思いますが、1日の練習時間は、基礎練習をもっとしたいので、少し足りないような気がします。でも、他の人達は「ちょうど良い」と思つてゐるようです。

私は去年、未公認ですが、200m個人メドレーで学童新記録を出したし、記録が伸びてゐるので、クラブやコーチから次期オリンピック選手としてとても期待されていると思うし、両親もわりと期待してゐるようです。

私は最初家の近くのスイミングスクールに通つていたのですが、記録が良かったので、そこの先生からこのクラブを紹介されて入りました。入つて良かったことは沢山ありますが、やっぱり、記録が伸びたことが一番です。疲れて勉強ができないことや家人の人と出かけられないことはいやですが、今はそうしたことより水泳です。でも少し肩が痛いのが気になつています。

私はスポーツがとても好きです。学校では、バスケットボールクラブに入つてゐます。昼休みなどは、よく走り回つて遊んでいますが、放課後はスイミングに行かなければならぬので、遊びやスポーツはまったくしません。もし時間があれば、マンガを読んでることが多いです。体育は一番好きな教科で、他には図工と算数が好きです。今はとても健康だし、体力もついたので一生懸命頑張っています。

両親もスポーツはとても好きで、お父さんはテニス、お母さんはバスケットをしていました。だから私が頑張っていることをとても応援してくれています。夜8時まで練習なので、お母さんは毎日夕食のお弁当を持って、迎えに来てくれます。

将来の夢は、アトランタのオリンピック選手になることです。もしなれなかつたとしても、シドニーまで頑張ろうと思います。だから、中学は、このクラブに近い私立を選びました。勉強も大変になると思いますが、頑張るしかないと思います。その後は、今は判りません。

## (3) 体操が好きだし、先生みたいになりたい！

	午前	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	1:00	2:00	3:00	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00
月曜日	睡眠	身支度	朝食	登校	学校						下校	テレビ	勉強	お手伝	夕食	入浴	自由時間		睡眠
火曜日	睡眠	身支度	朝食	登校	学校						下校	身支度	スマイミング電車	スマイミングクラブ	スマイミング電車	スマイミング電車	スマイミング	夕食	睡眠
水曜日	睡眠	身支度	朝食	登校	学校						下校	勉強	身支度	スマイミング電車	スマイミングクラブ	スマイミング電車	スマイミング	夕食	睡眠
木曜日	睡眠	身支度	朝食	登校	学校						身支度	スマイミング電車	スマイミングクラブ	スマイミング電車	スマイミング	スマイミング電車	スマイミング	夕食	睡眠
金曜日	睡眠	身支度	朝食	登校	学校						下校	身支度	スマイミング電車	スマイミングクラブ	スマイミング電車	スマイミング	スマイミング電車	スマイミング	睡眠
土曜日	睡眠	身支度	朝食	登校	学校						下校	身支度	スマイミング電車	スマイミングクラブ	スマイミング電車	スマイミング	スマイミング電車	スマイミング	睡眠
日曜日	朝食	身支度	スマイミング電車		スマイミングクラブ							スマイミング電車	テレビ	スマイミング	スマイミング	スマイミング電車	スマイミング	テレビ等	睡眠

図1 トップをめざす子ども（水泳選手）の一週間

### ～公設体操クラブの子どもたち～

東京近郊の公設スポーツセンターに設置されている体操クラブは、全日本クラスの選手を輩出し、現在でも優秀な選手を抱えるクラブである。ここには、一般コース（週2日）と選手養成・選手コースが設置されており、公設故に、後者には技能的・年齢的に幅広い子どもたち（小学生～高校生）が25名程在籍している。熱心な専任のコーチと、数多くのボランティア（コーチの教え子等）が指導している。ここでは、既に全日本の強化選手レベルの児童と、そのレベルを目指す児童（いずれも女子）のスポーツ参加について見てみる。

Dさんの場合……私が入っているこの体操クラブは、休館日の水曜を除いて、4時半頃から9時頃まで、毎日4～5時間位練習しています（日曜日は午前中からや昼頃からのときもあります）。練習は先生（専任コーチ）やコーチが指導してくれます。私は、病気とか、家の用事とか、学校の行

事が重なったとき以外は練習に出ます。練習の日数や時間はちょうど良いと思います。私は、年齢制限で出場できない大会以外は、ほとんどの大会に出ています。成績も上位なので、先生からはわりと期待されていると思います。特に、もっと難しい技ができるようになることや大会で勝つことを期待されていると思います。両親もオリンピック選手に選ばれることを期待しているようです。

私は、幼稚園の頃、本当はバレエがしたかったのだけれど、難しそうだったから、鉄棒で遊んでいました。面白かったし、ここに入ると鉄棒ができるとお母さんが教えてくれたので、1年生の終わり頃入りました。入って良かったことは、体操が上手になったことが一番です。それと体力がついたことも良かったと思います。入って悪かったことは、練習があって友達と予定が合わないから遊べないことや家人の人と出かけられないことです。

私は汗を流すことが好きだから、スポーツや体

育の授業は大好きです。昼休み等も縄跳びをしたりサッカーもします。でも放課後は練習があるので外遊びやスポーツはぜんぜんしません。学校では「配り」と「栽培」係りをしています。クラブは「演劇」です。好きな授業は、体育と音楽と国語です。成績は真ん中位だと思います。

私の家族は、両親と姉、兄2人の6人家族です。お姉さんはバスケットボール、お兄さんはサッカーとバスケットボールをしています。両親はスポーツをしていませんが、子どもがスポーツすることには大賛成で、お母さんは毎日、車で7~8分ですが、送り迎えをしてくれます。体操は大好きだし、中学生になっても、高校生になっても、続けたいと思います。できれば、大学生になっても続けて、先生のようにオリンピックに出たり、コーチになりたいと思います。ああ、それから、美容師にもなりたいな。

Eさんの場合……彼女は、前出のDさんと同様、この体操クラブの選手コースに通う児童である。したがって、練習時間等はDさんと変わりはない。しかし、技能レベルは彼女程高くはないが、東日本Jr大会では上位に入賞する実力を有する選手である。

彼女は、体操を民間のスポーツクラブで始めたが、コーチは優しいだけだし、満足できないので、3年生のときにこのクラブに通うようになった。それは自分の希望でもあった。現在は前述の実力を有しているが、まだまだ技が上手くはないから、専任コーチにはあまり期待されていないと自分で思っている。しかしながら、彼女は1年半程前から他の2人の児童と共に専任コーチの家に下宿し、近くの小学校に通いながら、練習を続けているのである。また、練習のない水曜日にはバレエを習い、食事制限をし、減量着を身につけ、体操

を続けている。本人は、両親からあまり期待されていないと感じているようであるが、しかし、下宿代・会費・父母会費・バレエレッスン代・コーチ交通費等を合わせると月に8~9万円程の出費があり、また希望者だけではあるが、過去2年間にハワイとオーストラリアでの海外合宿にも参加しており、年間の必要経費はかなりの額になることから、両親の期待は大きいと思われる所以である。

彼女は、現在の状況には満足しているが、自分ができる範囲で頑張り、上手になりたいと思っている。体操は大学に入っても続けたいが、大会出場は高校生位までで、できるだけ大きな大会で勝てればいいと思っている。将来何になるかはまだ判らないが、尊敬する専任コーチが、彼女のあこがれでもある。

### 3. おわりに

10数名の「トップを目指す子どもたち」を面接してきたが、彼らのほとんどが、競技力を高めることで、将来の自分が決定されると思っている。彼らは技能や記録が向上している今、それぞれの夢の実現に微塵の疑いも抱いていない。指導者も親も、子ども本位で、それを応援し、できるだけのことをしようとしている。そのことは、子どもたちに新たな目標をつくりだし、やる気をおこさせている。そうしたことについて、ことさら異議を唱えるつもりはないし、こうした材料もない。しかしながら、彼らが伸び悩んだり、傷害を抱えたとき、はたしてどのようなスポーツ生活となるのであろうか。勝利や記録の達成が、青少年スポーツのすべてではないだろう、という些かの疑問を感じるのである。

(宮内孝知)

## (関 西 地 区)

### 1) 小 学 生

#### S F型—学校内クラブ活動参加型

##### 1. 小6年男子＜サッカークラブ＞

「家族の応援を受けて、将来はJリーグ選手をめざす」(関西都市部近郊住宅地)

5, 6年生で編成される校内のサッカークラブでDFをしているが、指導者からは技術的なことでもよくほめられ、わりと期待されていると感じている。家族はとくに父がスポーツに強い関心を示し、姉(中3)もバスケットボールの選手をしていて、自分のスポーツ活動を応援したり、話し相手になってくれている。仲間も技術面でDFのポジションを十分こなすよう期待していると思っている。将来はJリーグ選手になりたいと真剣に考えているため、現在の週2回各2時間のクラブ活動ではまったく物足りず、最低週4回、1回活動時間4~5時間は必要だと思っている。また、それを補う意味で、現在仲間と毎日2時間以上学校以外の場所でサッカーをしている。

中学ではJリーグ選手を輩出した名門サッカークラブに入ることが決定し、部活でもサッカーチームに入ってJリーグ選手をめざした本格的なサッカーが行えることを楽しみにしている。できれば、クラブではキャプテンをやりたいと思っている。

本当はもっと早くから本格的なサッカークラブに入りたいと思っていたが、一緒にに入る仲間がいなかったので5年生まで待った。クラブに入った理由は最初から「有名な選手になりたかった」ためで、このクラブに入って良かったことは「親しい友達ができた」「体力がついた」「精神力がついた」「運動が好きになった」「積極的になった」「上手になった」など、多くの点を評価している。

#### コ メ ント

有名なJリーグ選手を輩出している土地柄もあり、家族や周囲の期待を受けて夢の実現のために努力しようとする意欲はすばらしい。しかし、

夢が大きすぎるだけに自分の能力の限界を知ったとき、どのように周囲がサポートするのかが大きな問題であろう。周囲の期待が本人の能力とかけ離れたところで膨脹し過ぎないように客観的なチェックが常に必要であると同時に、ストレスが大きい分、早期にバーンアウト(燃え尽き)しないような支援体制が望まれる。

#### S F型—学校外クラブ活動参加型

##### 2. 小6年男子＜地域ソフトボールクラブ＞

「地域で盛んなソフトボールを親子で楽しめるが、大人の都合で練習がないことがあるのが不満」(関西都心部商業地)

地域で盛んな野球やソフトボールを少年スポーツにまで広げ、場所の確保は難しいが週1回日曜日に2~3時間程度行っている。3~6年生までが参加でき、現在副キャプテンをしている。指導者は友だちの父親や大人の野球チームの人たちが担当している。指導者の技能レベルはとても上手で、優しく教えてくれるので好きである。しかし、活動日数は少し足りないと感じており、その上大人の都合で週1回の練習もできないことがあるので、必ず最低週1回はしてほしいと願っている。

選手の決定は監督やコーチが決めているが、実力をしっかりと見極めていて誰もが納得するような決定なので不満はない。本人自身は、試合にいつも出してもらっているので指導者からはわりと期待されていると思っている。また、全員スポーツ歴のある家族(両親、中3ソフトボール部の姉)からは将来甲子園に出てほしいと言われている。仲間からは、副キャプテンとしての人間関係の調整と守備力を期待されていると感じている。

また、このクラブ以外でも学校の昼休みにはサッカーをよくするし、放課後には野球、サッカー、バスケットを友だちと地域のグラウンドで時々行っている。中学校では、家族の期待通り野球部に入部するつもりである。

## コメント

地域スポーツが少年スポーツの受け皿になって地域の大人と子ども、あるいは異学年の子ども同士の連帯性を深めているケースである。大人の都合によって練習がなくなるときがあること、場所の確保がむずかしいことなどの問題点はあるが、ソフトボールが商業地区で稀薄になりがちな地域の結びつき、親子の結びつきを深める機会になっていることは確かである。今後学校5日制のもとでますます受け皿としての地域スポーツの役割が期待されているが、その理念と指導、実施のあり方を含めて総合的に検討する必要があろう。

### I F型一体育の授業や体育的行事積極的参加型

#### 3. 小6年男子＜理科クラブ＞

「今は受験のための塾通い。中・高一貫校合格のあ까つきには思い切りサッカーをする。」(関西都市部近郊住宅地)

4~11才までスイミングスクールに通い、かなりのレベルにまで達していたが、5年生になって親から塾通いを勧められ、受験のためにスイミングスクールや校内の体育クラブもやめてしまった。しかし、普段の生活の中ではよくスポーツをする方で、放課後4時から5時ごろまで毎日20人以上の仲間とサッカー遊びをしていた。現在は、受験が近づいているため（1月時点）毎日2時間以上塾があるので、第2土曜日や日曜日以外はサッカーライフはできない。

しかし、受験校は中・高校一貫校であり、今受験のために定期的なスポーツができなくても、合格したあ까つきには6年間サッカー部で思い切り活動できることを楽しみにしている。そのため拘束されないインフォーマルなスポーツ集団の中で、自分のスポーツ欲求を満たしている。その意味では、とくに現在第2土曜日の学校でのサッカーライフは貴重な時間になっている。

居住区は商業地区で、家族は祖父母を含め6人の3世代家族であり、両親はもちろん、祖父母や姉（高1・テニス部所属）ともスポーツのことをよく話題にする。自営業なので家族の手伝いも時々しなければならないが、中・高校では部活に専心

したいと思っている。

## コメント

小学校高学年から受験との関係で将来のスポーツとの関わりを長期的に考え、現在はインフォーマルに好きなスポーツを続けながら中学校受験をクリアすることで将来の定期的なスポーツ参加を計画的に保障しようとするケースである。受験の重圧が小学校期のスポーツ参加のあり方にまで影響を及ぼし、意図的にそのときの参加欲求をコントロールしなければならない状況とそれを子ども側が納得する構図が浮かび上がってくる。このこと自体が構造的な問題を孕んでいるが、そのバランスを保つ意味でインフォーマル集団の役割は大きく、その機会の保障が課題となってこよう。

### N型一運動消極的参加型

#### 4. 小6女子＜合唱クラブ＞

「夢はアイドル。体育の授業は嫌いではないが劇団中心の生活に納得。」(関西都市部近郊住宅地)

体育の授業は嫌いではないが、普段スポーツはあまりしない。しない理由は、「苦手」「暇がない」「嫌いではないが体が痛くなったり、気分的に疲れる」からである。しかし、最大の理由は自分が以前から憧れていたアイドルを目指すために、オーディションに合格してスポーツどころではなくなったからである。劇団のレッスンは毎週日曜日2時間だけであるが、通うのに片道2時間もかかり、内容も本格的なのでそのための宿題や準備に追われる毎日を過ごしている。実際にはあまり太ってはいないが、母親からは「太っているのでスポーツをしなさい」と言われている。家族は、祖母、母、本人、弟、妹の5人だが、劇団でのレッスンを成功させるため、そしてアイドルになるために生活が回っているようである。

5年生のときに学校のスポーツ教室でバレーボールをしていたが、同じく学校の合唱クラブと時間が重なったことと練習が厳しかったので後者を選択した。第2土曜日は劇団のことが中心になるが、学校開放でときどきサッカーなどの行事があるときには参加することがある。学校以外では普段から腕時計をし、時間のことがいつも気になっ

ている。

## コメント

スポーツは苦手だが、体育の授業が嫌いなわけではない。しかし、本人の強い希望で劇団に入り、それを中心にして生活が回っているためスポーツをする機会を奪われ、スポーツ参加に消極的にならざるを得ない状況である。一方で、過去に学校

のスポーツ教室に参加しているながら文化クラブとの選択を強いられていること、本人にとって練習が厳しかったなどから、一概にスポーツへの消極性が劇団に入ったことだけで説明できない部分もある。さまざまな子どもの生活状況やスポーツ欲求のレベルを把握し、文化クラブとの時間的調整など条件面を整えていく工夫が求められているのではないか。

## 2) 中 学 生

### F型一校内外スポーツクラブ積極参加型

#### 1. 中3男子<バスケットボール・主将>

「尊敬する指導者の影響が強すぎて、スポーツ経験を規範的に、固く考えてしまう」(関西郊外新興住宅地)

1年に入学と同時に、それまであまり強いとはいえないかった部活動に教え方が上手で尊敬できる先生がきて指導した結果、みるみるうちに技能レベルが高くなり、3年次にはブロックでも有数のチームになった。その指導者が教える以前から週7日1回練習時間2時間程度のハードな練習内容であったが、以後まったく同じ練習時間（試合のときは試合時間を含め3～5時間）でも練習内容は苦にならなくなってしまった。指導は技術的な内容だけに止まらず、学校生活の規律全般に及んで厳しいが、それは自分たちのことを本当に考えてくれる結果であると納得している。

また、主将としての自覚が非常に強く、指導者や仲間からはその面での役割の発揮を強く期待されていると感じている。親からは勝つことを期待されていると感じているが、指導者からは勝つことは二の次で自分たちの力を十分に発揮することが大切であると教えられ、本人もそのように自覚している。しかし、選手やクラブの役割の決定、練習内容はすべて指導者が決定し、第2土曜日も普段より程度は軽いが練習や試合を行っている。指導者がいないと他のメンバーの練習が怠惰になりがちなので、主将として指導者の指示通りの練習をさせることが大切だと思っている。

悩みは、クラブ以外の仲間との交流がないこと、行動範囲が狭く、他の活動がなかなかできないことであるが、指導者から高校・大学では中学とは違うバスケット経験ができるので継続するよう言われ、本人もそのつもりでいる。

#### コ メ ン ト

F型参加における指導者のカリスマ的な役割が多感な時期の中学生に強い役割期待を感じさせ、

その期待通りに行動させているケースである。このような「過社会化」されたスポーツ行動がどれだけ優れた指導者を媒体として行われたとしてもそのコミットメントが一元的であれば、将来とも「かたい」スポーツ観を引きずっていく結果になりはしまいか。

### F型一校内外スポーツクラブ積極参加型

#### 2. 中3男子<陸上短距離・パートリーダー>

「計画的なスポーツ参加が役割葛藤を引き起こす」(関西郊外新興住宅地)

小学校時代（8～12才まで）少年野球チームに入っていたが、中学校ではその野球チームのコーチの勧めで野球部ではなく陸上部に入部した。その理由は、中学生から本格的に野球を始めると肩を使い過ぎること、この時期に陸上を行うことで野球に必要な基礎体力を養うためである。そして、その助言通り陸上部でトレーニング（週6日各2時間）を重ねた結果、200mとリレーでブロック大会に出場し、活躍するに至った。

しかし、今度は陸上部の指導者から陸上をこのまま継続するよう勧められ、野球の手段として始めた陸上競技の能力がつき過ぎてしまったことに悩んでいる。確かに、陸上を行ったことで「親しい友人ができ」「体力がつき」「粘り強くなって」そのスポーツが上手になったことは良かったと思っているが、放課後や外遊びでは野球やサッカーを時々しており、友人との会話も野球を中心で、高校ではやはり野球部に入って甲子園を目指したいと考えている。

現在の指導者からは、陸上競技の能力を伸ばしてほしいとの強い期待があることは承知しているが、体育大学出身でバドミントンを継続している母親、同じ少年野球チームに所属している弟など家族はスポーツに关心があるもののあまり干渉せず、本人の自由意思に任せている状況である。

#### コ メ ン ト

F型のスポーツ参加が小・中・高を通じて指導

者の影響のもと計画的に行われ過ぎると、所属の違う他の指導者の期待によって役割葛藤が引き起こされる場合がある。一貫した指導体制ができないわが国では、指導者の異なる時期に悩むケースが案外多いのではないか。幸いこのケースは目標が明確に内面化されているため大事には至らないが、家族や指導者とのコミュニケーションが重要なになってこよう。

#### S F型一校内クラブ活動参加型

##### 3. 中2女子＜陸上長距離・部長＞

「来年の受験に備え勉学の両立に不安を隠せない。仲間や先生の期待に応えるために努力しているが、もう少し余裕が欲しい。」(関西郊外新興住宅地)

市町村レベルの大会にいつも中心レギュラーとして出場しており、週6～7日、1回1～2時間程度の活動時間をさほど苦にしてはいない。しかし、塾に週3日間（1回2時間以上）通い、3年次の受験に備える体制を整えているが、第2土曜日も普段の土曜日と同じように部活があり、練習が休みになればいいのにと思うことがある。

一方、指導者からは大会に勝つことをわりと期待されていると感じており、仲間からも試合などでとても期待されていることを言葉にされる。また、他のクラブとの共有で練習場所が狭いのにもかかわらず部員数が多いので指導者の指導が行き届かず、とくに力を注いでいる部員がわかってしまうところが部長として気になっている。選手の決定は、各自出たい種目を決め、記録と出席率を重視して指導者と部員が話し合って決めるが、決局いつも出れない人の不満を感じることがある。

電車通学で30分の時間が必要だが、スポーツ活動では決められた時間に遅れないようにすることを大切にしている。部長としての責任感は非常に強いが、高校では硬式テニスをしたいと思っており、陸上競技への未練はとくにない。

#### コメント

来年受験期を迎える中学2年生にとって、部活と勉強との両立に対する不安から2年次に部活を引退したり、その両立に悩んでいる生徒は少なか

らずみられる。まして、このケースのように責任のある役割を引き受けた場合には、その悩みはよりいっそう大きくなるであろう。しかもF型の活動と比べ、S F型の活動タイプは種目に対する思い入れもそう激しくなく、自分のその時々の適性や行える範囲内での定期的なスポーツ活動を望む傾向にある。とくに中学生のニーズに応じた部活のあり方—第2土曜日の取扱い、活動内容の個別化、学年進行に伴う活動内容、役割の多様化などを再検討し、工夫する時期ではないか。

#### I F型—運動部に所属しないが、体育授業・行事積極参加型

##### 4. 中3男子＜理科部 受験重視＞

「運動部には所属しないがスポーツは大好き。確かにインフォーマル集団が存在する。」(関西郊外新興住宅地)

学校の昼休みや塾のない放課後にときどきサッカーやテニスをして汗を流す。とくに放課後のサッカーはいつも集まる8人の仲間がおり、学校のグランドの片隅で週2回2時間程度実施している。スポーツをすると「体力がつく」「運動が上手になる」「健康になる」「とにかく楽しい」と思っており、スポーツを行う上での悩みは文化系クラブなので体力がないことである。

しかし、これまで部活に入ろうとしなかったのは、小学校のときから高校・大学の受験を意識していたからであり、高校進学後入部してもよいと考えていたサッカー部は志望校にないため部活への参加は考えていない。姉弟が4人と比較的多く両親とも共働きで家計は苦しいと感じており、なるべく大学進学後経済的負担をかけないようにとの考え方から、受験を突破してよい就職先を見つけてみたいと思っている。

インフォーマルなスポーツ活動を続けていく上で最大の悩みは、場所の確保である。普段中学校のグランドは部活に専有されており、もっとも場所が十分に確保されるのは、第2土曜日に開放される小学校のグランドである。

#### コメント

諸般の事情により部活や他のスポーツクラブな

どフォーマルな集団には参加しないが、積極的に自らインフォーマルなスポーツ活動をしている中学生は案外多いのではないか。不参加の理由は受験のためが第一であろうが、従来から考えられてきた部活と勉強の両立という概念から、学校以外の学習のフォーマル化（塾通い）によってインフォーマルなスポーツ活動と勉強の両立の概念が出てきているように思われる。しかし、このような中学生のスポーツ参加の「柔らかい」選択に対する実状に即した活動場所の提供が十分ではない現状がある。制度的には組織化されないスポーツ参加の実情把握と条件整備が緊急課題である。

#### N型－運動消極的参加型

##### 5. 中3男子＜テレビ・ファミコン中心＞

「塾が終わればファミコン、テレビ。スポーツはめんどうくさい。」（関西郊外新興住宅地）

週4回各2時間以上の塾通いのほかは、もっぱら自宅でテレビ視聴やファミコンにふける「お宅族」の類である。学校の休み時間や放課後、あるいは休日などをを利用してスポーツをすることはほとんどなく、体育の授業もあまり好きではなく、スポーツについての会話もありする方ではない。また、文化部にも入っておらず、好きな教科もこれといってない。体重はやや肥満気味である。

スポーツをしない理由は、「スポーツが苦手」「めんどうくさい」「塾や習いごとで忙しい」ことをあげており、校内・校外のスポーツクラブに入らな

い理由も同じように「練習が厳しすぎる」「めんどうくさい」「塾や習いごとで忙しい」ことをあげている。

しかし、過去にもまったくスポーツクラブに入っていたいなかったわけではなく、中学1年の夏までハンドボール部に所属し、小学校では地域のソフトボールクラブに4～6年生まで参加していた。ハンドボール部をやめた理由は練習が厳しかったからである。週2～3回程度の練習であれば続けられていたかもしれないと思っている。体力、運動能力もあまりなく、クラスでの成績も下位であると自覚し、家庭的には母子家庭である。

#### コメント

一般的にこのような生徒は、本来、無気力、無感動型の性格特性を持ち、家庭環境などの影響からスポーツだけに限らず他の生活場面においても消極的傾向を示すととらえられ、因果帰属を本人一人に集中させがちである。しかし、このケースでは小学校3年間を地域のクラブで楽しくソフトボールをすることができたが、中学校の部活ではハンドボールに関心があるにもかかわらず練習が厳しすぎて離脱しており、それが以後のスポーツその他の関わり方に影響を与えていたように思われる。スポーツ参加は決して生活態度の活性化への万能薬ではないが、もし部活の活動内容やレベルに多様性があれば、このような生徒にとっても意味ある様々な経験を提供できるのではないか。

### 3) 高 校 生

#### F型一校内外クラブ積極参加型

##### 1. 高3女子＜陸上・投てき＞

「国際大会2位の実績。練習はのびのびと行っているが、記録の維持・向上への目に見えないプレッシャーが…」（関西住宅地）

所属する陸上部は全国でもトップレベルで、インターハイでも常に総合成績上位、優勝も何度もかしている。その中でも投てき部門で国際大会2位の実績を持つ彼女はトップクラスである。練習は週7日各4時間程度であるが、終了後も自己調整を行い、昼休みにもフォーム練習などを行っている。しかし、練習はつらいのが当たり前で、それを克服するために毎日目標を立て、やる気を出さないと記録も伸びないし、勝てないことを自覚している。だから、練習量はちょうどよいと思っている。

指導者からは記録を伸ばして活躍し、将来は指導者になることを期待されていると思っている。両親や仲間も記録向上を願っており、家族とのスポーツの会話はもっぱら陸上の成績のことばかりである。したがって、活動上の悩みは「競技の記録や成績の低下」であるが、今までのところスポーツ推薦で大学進学が決定したことを含めて、精神的にも身体的にも陸上競技を続けてきてよかったですと思っている。

今後大学4年間の生活も陸上競技一色になることにためらいはなく、さらに記録の向上をめざしたいと思っている。

##### コ メ ン ト

これまで高校3年間に比較的順調に記録が伸び周囲の期待に応える形でのびのびと練習に励んできたという感じである。しかし、学校関係者の話では、この高校出身者の大学へ行っての活躍は思ったほどより少なく、伸び悩みが目立つという。高校3年間の急速な記録の伸びとその後の停滞、指導者の変更、生活環境の変化が、指導や練習方法への一貫性を欠く結果となり、競技生活に対する

選手の柔軟な対応を難しくさせているのかもしれない。トップアスリートの努力が結果に結びつかない場合でも、合理的、客観的にそれを理解しバーンアウトを回避させるような総合的な支援体制がこの時期の彼らには是非必要である。

##### I F型一体育の授業や体育的行事積極的参加型

##### 2. 高3女子＜書道クラブ・英語クラブ＞

「中学時代のケガがもとで部活を断念したが、将来はこの経験をもとにスポーツ実践に役立つ理論を勉強したい」（関西住宅地）

スポーツや体育の授業は「とても好き」で、第2土曜日や日曜日は勉強の後、ジョギングや散歩相手がいれば軽いバレーボールやキャッチボールを行ったりする。小学校時代は、県の陸上記録会で3位、中学時代はソフトボール部に所属し、趣味でバスケットボールもよく行っていた。この高校にも運動部の活躍が目立つので自分も是非参加したいと思って入学したが、中学時代のケガがもとで医者から運動を制限するように言われ、現在のように不定期なスポーツ活動を行っている。

しかし、自由に体が動かせるのであればもっと運動をしたい欲求があり、現在のようなスポーツ活動には満足していない。スポーツをする理由は「友人がふえる」「気分転換になる」「人への思いやりが育つ」「我慢強くなる」「健康になる」「とにかく楽しい」など多方面にわたっており、その評価は高い。両親ともスポーツ歴があり、両親・友人とスポーツに関する会話の機会も多い。

将来は自分のできる範囲で様々な種目のスポーツにかかり、自分に向いている点、長所、短所などを見極めながら継続していくみたいと思っている。そして、最終的にリハビリや栄養学の勉強をしながらスポーツとかかわり、自分の経験を生かしていきたいと考えている。

##### コ メ ン ト

高校期になると、自分のスポーツに対する考え方方が明確になってくる反面、ケガなどで自分の思

い通りにスポーツ活動ができない生徒も潜在的に多いのではないか。このケースのようにスポーツへのかかわり方に対する冷静な目を持ち、それを将来に生かしていくとする生徒には、その欲求を満たしていく活動の受け皿が必要ではないか。また、クラブ活動への情熱を持ちながら、故障その他でこれまでのような運動がしたくてもできなくなってしまった生徒に対する多様なスポーツ体制の方を学校だけの問題ではなく、広く地域の問題として考えていく必要もあるう。

#### N型—運動消極的参加型

##### 3. 高3男子<文化部の所属なし>

「スポーツは好きだが、競争スポーツ中心の体育授業は嫌い。将来自分に合ったスポーツを見つけたい。」(関西住宅地)

高校では何もスポーツをしていないが、スポーツは好きであり、スポーツに関する会話も家族や友人とすることがある。しかし、体育の授業は体力や運動能力に自信がなく、しかも競争したり、タイムを計ったりするスポーツがあまり好きではないので消極的である。現在、部活をしない理由は「練習が厳しそうだから」「入りたいクラブがなかったから」である。中学校のときは軟式テニス部に所属していたが、50人の部員に対してコートが一面しかなく、試合にも全く出場できなくなってしまった。高校での部活拒否もこの時の経験が

多少尾を引いているようである。

本来、体を動かすこと自体は好きな方だと思っているので、大学に進学したらこれまで経験してこなかったワンダーフォーゲルなどの野外スポーツを行いたいと考えている。家族はもともとスポーツ一家であり、父親は空手、母親は水泳と新体操の経験があり、弟はテニスとホッケーを行っていた。家族の本人に対するスポーツ行動への直接的な影響は見られないが、スポーツへの興味を失わず、将来自分に合ったスポーツを実施したい希望を持っている点で間接的な影響はある。

#### コメント

平成6年度から高校の体育授業では本格的な種目の選択制が導入されるが、このケースはその意義が最も発揮される例の1つになるであろう。高校生は、過去のスポーツ経験から自分のスポーツへの興味、関心が強く意識される場合が多く、授業においても自らの欲求に合った種目形態や方法を選択することによって、自分の個性を伸ばすスポーツの楽しさを経験することができる。その意味で高校の体育授業における選択制の導入は回避できない課題である。また、部活における最低限の条件整備ができていなければ、かえってスポーツ嫌いを生み出す要因の1つにもなりかねないので学校や地域の施設面での充実が望まれる。

(菊 幸一、森美佐紀、鳴 香織)

### 3. まとめ

#### 小学生の場合

- ①学校外のスポーツ参加はスポーツ少年団中心。  
(サッカー、野球、剣道等)
- ②学校体育カリキュラムへの予備的な準備あるいは喘息等の身体的な対応としてスイミングスクールに通った経験を有する児童が多い。
- ③テレビゲームへの関心は高くどの地域の児童でも見られた。
- ④テレビの影響もあり、Jリーグ関心は強く、サッカーレベル的な遊びが休み時間に行われていることが多い。実際に、Jリーグ選手を出した地域では、子どものスポーツ活動に大きな影響を与えている。
- ⑤下校後の遊びやスポーツ活動をしない理由は、都市では塾、おけいこ事等の関与が大きく、山間、農村地域では、通学距離の関係で左右される。
- ⑥家族のスポーツへの関心の程度は、児童のスポーツ参加に多少とも影響している。
- ⑦第2土曜日の使い方は、スポーツ少年団等の練習に当てられることもあるが、それ以外は友達との遊びに使う者が多い。
- ⑧インフォーマルスポーツ型（IF型）では、固定的なインフォーマル集団ができているケースが多く、自主的にスポーツ活動を行っている。しかし、近年、校内スポーツクラブが増加する傾向があり、その影響でインフォーマルスポーツ集団が縮め出される傾向が見られる。
- ⑨都市部商業地区では、スポーツ少年団ではなく、純粋な地域ボランティアによる地域スポーツ優先型の定期的スポーツ活動が見られる。メンバーの役割・ポジション等についてはやはり、指導者が主導権を握っている。また、地区的な特性から場所の確保が難しく、地域と学校との指導者交流を含めた連携のあり方を総合的に考えていく必要があろう。
- ⑩本人の希望や周囲の期待によって、いま、圧倒的な人気のあるサッカーなどで、小学生から選

手を目指す子どもも出てきて不思議ではないが、その夢の判断が冷静な評価の下で行われ、その夢が破れたときでも、そのマイナス状況を支援する周囲の体制がどの程度できているのかは現在のところ不明であり、今後の課題となろう。

#### 中学生の場合

- ①中学生の生活…部活動がその大半を占め、1週間の生活は忙しい。
- ②部活動の状況
  - ・地域により活動時間に差が見られる。
  - ・活動内容の限定（指導者との関係）
  - ・学校差…スポーツ活発校は週6～7日の練習。試合の成績により活動日数が増減。強い学校は練習日数が多い。
  - ・指導者の高齢化、指導者のプライベートな時間の確保の難しさ等の問題。学校内活動から学校外活動への移行の検討
- ③高校受験…殆どの生徒が塾、予備校、家庭教師との関わりを持つ。
- ④第2土曜日…部活動なしで好きなことをやりたい生徒と部活動をもっとやりたい生徒に2分される。
- ⑤フォーマルスポーツ型（F型）では、将来の展望が明確な傾向にあるが、小学校と中学校の指導者が異なるために、将来のスポーツ参加のあり方に対する役割葛藤が引き起こされるケースがある。指導者交流、生徒とのコミュニケーションのあり方、生徒の興味の移り変わりを多様に認めていく体制づくりが必要である。
- ⑥また、F型参加では、カリスマ的指導者の影響力が大きすぎて、スポーツ参加への役割意識や規範信念が強すぎ、柔軟なスポーツ参加の状況を許容出来ない子どもも見られる。指導者の生徒にたいする関わり方の空間を多様に位置づけ、使い分けて、スポーツ参加の意味空間を広げる工夫が必要であろう。
- ⑦スポーツへの参加意欲の乏しいノンスポーツ型（N型）参加では、部活動の厳しさについてい

けずに離脱し、かといって I F型のスポーツにも参加できない消極的な子どもが多い。しかし、このような子どもでも関心のあるスポーツはあり、厳しくなければ、週2～3回程度定期的に好きな種目を行いたいと思っているケースがある。これまでの一種目一部門型の部活動ではなく、一種目多部門型のクラブの形成、多様なクラブ経験の保障、シーズンスポーツ制などの大胆な試みが課題となろう。

#### 高校生の場合

- ①競技成績が上位（大会出場レベルー全国大会以上）の高校生は、勉強との両立を考えながらスポーツに打ち込んでいる（進学校の場合）。しかし、そこで、犠牲になるのは遊びの時間である。競技としてスポーツをすることをやめる時期を考えており、やめた後は少しゆったりしたいと考えている。
- ②競技成績の中程度（大会レベルー都道府県大会以下）の高校生は、スポーツにおける自分の能力の限界を知っており、大会などで勝つことを目標とするが、楽しさを求めてスポーツを行っている。生涯にわたってスポーツを続けるという意欲が高いのが特徴的である。
- ③現在、スポーツクラブに所属していないが、スポーツは好きであるという高校生は、中学時代までにスポーツクラブに所属していた傾向が高い。しかし、過去のスポーツクラブ経験において

て否定的な経験（クラブ内の人間関係のもつれ、怪我など）、現在の学校に自分が入りたいクラブがない、他にやりたいことがある（文化系クラブ、勉学、アルバイト等）といった理由で、現在はスポーツクラブには所属していない。だが、スポーツをやりたいという欲求は高く、学校の休み時間や休日などに体を動かすことが多い。機会があればもっとスポーツをしたいと考えている傾向が見られる。

- ④現在、スポーツクラブに所属せず、スポーツがあまり好きではないという高校生は、運動やスポーツが苦手であると感じているようである。スポーツが苦手であるという意識は、小学校時代からであり、特に、小学校期においてスポーツが苦手であることで仲間の外においやられるという経験を持っている。将来もスポーツはしないと考えている。

#### スポーツクラブ所属者ー小学生ーの場合

- ①トップアスリートを目指すジュニアクラブ（サッカー、スイミング、体操）の小学生は、技能や記録が恒常している現在は、それぞれの夢の実現に疑いを抱いていない。
- ②しかし、彼らが停滞したり、障害を抱えた後のスポーツ生活への問題が残るが、今は、家族ぐるみの練習体制をひいており、孤独感はない。  
(嘉戸 健、宮内孝知、加藤爽子  
高橋京子、菊 幸一、長見 真)

## 第2部 心理学的側面からの青少年スポーツ参加に関する研究

### 第1章 青少年のスポーツキャリアパターンおよびスポーツ継続意識と 結果予期、有能感、勝敗に対する態度との関係

#### 1. 研究の背景と目的

青少年のスポーツ参加については、これまでに数多くの研究が行われている。本調査に先立って、我々は青少年のスポーツ参加に関する内外の研究の動向を知るため文献検索を行い、主要な研究についてその要約を試みた。その結果、研究の内容はおおよそ次のようにまとめられた。

1 総論	2 遊び・ゲーム
3 スポーツ参加の実態	4 参加動機
5 ドロップアウト	6 パーンアウト
7 スポーツの影響	8 有能感・無力感
9 自己概念・自己知覚	10 態度
11 不安・ストレス	12 攻撃・暴力
13 指導法	14 対人関係
14 社会化	16 競争
16 リーダーシップ	18 親の影響
19 性役割・性差	20 認知的能力
21 発達	22 障害者
23 ファン	24 社会・下位文化
25 生理心理	26 その他

これら研究内容の概観を通して、青少年のスポーツ参加に関してどのような研究が必要であるかを青少年のスポーツ振興や指導のあり方といった視点と合わせて検討した。そして、今年度は青少年のスポーツキャリアパターンの実態と、キャリアパターンおよび将来のスポーツ継続意識に関する心理的要因について研究を実施することにした。

一口に青少年のスポーツ参加と言っても、参加の形態には様々なものがある。なかでも、時系列的な参加状況であるキャリアパターンはその最も基本的なものと考えられる。すなわち、せっかくスポーツに参加しても止めてしまう者は少なくな

い。これに対して、同じスポーツを長年に渡って継続する者がいる。止めてしまう者の中には、まったくスポーツから離れてしまう者と他のスポーツに移る者がいる。また、一度止めて再び始める者もいる。そうかと思えば、スポーツにはまったく関心を示さず参加しない者もいる。

しかしながら、このような青少年期のスポーツキャリアパターンに関する研究はあまり行われていない。(中高年者について将来の継続を加味したものについては、平成4年度と平成5年度の日本体育協会スポーツ医科学研究報告書 中高年のスポーツ参加に関する社会学的・心理学的研究がある)そこで、本研究では、まず第一に、青少年期のスポーツキャリアパターンの実態を明らかにすることにした。すなわち、スポーツキャリアパターンがどのように分類できるのか、分類されたスポーツキャリアパターンにどのくらいの人数が含まれるのか、それらには男女差や種目による差があるのかを調べる。次に、そのようなスポーツキャリアパターンと将来のスポーツ継続意識を規定すると考えられる心理的要因を明らかにするのが第二の目的である。

スポーツキャリアパターンと将来のスポーツ継続意識を規定する心理的要因には様々なものが考えられる。本研究では、スポーツ参加に関する先行研究で明らかになった結果から、最も有力な理論的背景と考えられるバンデュラー(A. Bandura)のSocial Cognitive Theoryに基づき、そこで問題にされる変数を調査することにした。

Social Cognitive Theoryでは、人間の行動を規定する主な先行要因として、自分の行動についての予期と、環境の出来事についての予期の二つを想定する。自分の行動についての予期とは、自分がある行動をどのくらいうまく行うことができる

表1 勝敗に対する態度因子分析.VARIMAX回転後の因子負荷行列

変数	番号	項目内容	FACTOR 1	FACTOR 2
U30	4	スポーツは勝ってこそ喜びが生まれるものである。	0.771	-0.110
U27	1	スポーツは勝つことに意義がある。	0.710	-0.220
U37	11	スポーツでくやしい思いをしたくないので、ぜひ勝とうと思う。	0.689	-0.071
U33	7	スポーツの魅力は勝負があるからである。	0.647	-0.103
U35	9	スポーツで勝ったときの感激は何ものにもかえがたい。	0.556	0.049
U36	10	スポーツは学業の能率を上げるための手段である。	0.370	0.207
U40	14	スポーツはただ純粋に楽しむためのものである。	-0.111	0.650
U28	2	スポーツは汗を流してストレス解消になればよい。	0.046	0.606
U29	3	スポーツは余暇を楽しむためにやるものである。	0.035	0.592
U31	5	スポーツは楽しむためのもので勝ち負けはさほど重要ではない。	-0.350	0.577
U38	12	スポーツは気のあつた者同志で仲良くできればよい。	0.005	0.565
U34	8	スポーツは健康の保持増進のために行うものである。	0.211	0.465
U39	13	スポーツは苦しい思いをしてまで勝とうとする必要はない。	-0.257	0.418
U41	15	スポーツは勝敗よりも努力することに意義がある。	-0.017	0.392
U32	6	スポーツは日常生活の大切なものを犠牲にしてまで勝とうとするべきではない。	-0.181	0.386

FACTOR EIGENVALUE PCT OF VAR CUM PCT

1	3.17	21.2	21.2
2	2.06	13.8	34.9

表2 結果予期の因子分析.VARIMAX回転後の因子負荷分より

変数	番号	項目内容	FACTOR 1	FACTOR 2
U10	6	楽しんでやれると思う。	0.671	-0.240
U 7	3	気分転換やストレスの発散ができると思う。	0.632	-0.232
U 8	4	多くの友人がつくれると思う。	0.624	-0.087
U 9	5	チーム内で認められる人間になれると思う。	0.621	-0.043
U11	7	健康の増進に役立つと思う。	0.610	-0.099
U 6	2	体力を高めることができると思う。	0.557	-0.081
U 5	1	上手になれると思う。	0.480	-0.120
U12	8	就職に有利になると思う。	0.338	0.060
U15	11	お金や時間の無駄になると思う。	-0.075	0.755
U16	12	やりたいことができなくなると思う。	0.016	0.682
U14	10	自分には何の役にもたたないと思う。	-0.119	0.653
U13	9	しばらく続けると飽きてしまうと思う。	-0.124	0.529
U17	13	負けたり失敗していやな思いをすると思う。	-0.087	0.447

FACTOR EIGENVALUE PCT OF VAR CUM PCT

1	3.24	24.9	24.9
2	1.55	12.0	36.9

と思っているかということで、効力予期と呼ばれる。効力予期は具体的には、スポーツを続ける自信がどのくらいあるかを尋ねることになるが、自己効力感とも呼ばれるように有能感とも考えられる。そこで、本研究ではスポーツ実施に対する自信ではなく、運動に対する有能感を取り上げることにした。もう一つの変数である結果予期とは、自分がある行動をしたとき、それがどのような結果を引き起こすと考えているかということである。すなわち、人間は従事する行動に対して有能感をもっており、好ましい結果予期をしている場合に、その行動に積極的に参加するというのである。したがって、運動に対する有能感と結果予期がスポーツキャリアパターンを規定していることが想定されるのである。

以上二つは行動に普遍的な変数である。それにも加えて本研究では、スポーツ行動に特有の要因として勝敗に対する態度を取り上げることにした。スポーツ行動においては勝敗に対する態度は非常に重要な要因であり、勝つことを追及する傾向は同一種目の継続と、楽しむことを追及する傾向は複数種目の経験と関連することが予測されるからである。

## 2. 研究方法

### 1) 調査対象

3つの国立大学と2つの私立大学の学生男子739名、女子834名、合計1,573名。

### 2) 調査方法

主として本研究プロジェクトメンバーが、平成5年11月から12月にかけて実施した。

### 3) 調査内容と尺度構成

詳しい調査内容は、巻末に収録した調査票を参考してほしい。次に調査内容の概略をあげる。

- ①スポーツキャリアパターン：体育の授業以外に定期的に行ってきました運動・スポーツ名を、小学校、中学校、高校、大学について回答を求めた。
- ②将来のスポーツ継続意識：将来のスポーツ参加についてどの様に考えているかを、最も消極的な「今もやっていないが今後もやろうと思わない」から、最も積極的な「今もやっているがさらに条件を整えてもっと積極的にやるつもりだ」までの

7つの選択肢を用意し、回答させた。

③結果予期：これまでにあまりやったことのないスポーツを新たに始めたと仮定した場合、どのような結果が予想されるかを、13の項目について回答を求めた。これらの項目は、従来の研究でスポーツ参加者が期待したり、非参加者が参加しない理由としてあげているものを考慮して選んだものである。尺度構成を行うために、調査結果について因子分析を行ったところ、2つの因子が抽出された(表1参照)。第1因子の負荷のある項目はすべて良い結果が得られるという内容のもので、「ポジティブな結果予期」と解釈した。第2因子は逆に良くない結果となるというもので、「ネガティブな結果予期」と解釈した。信頼性係数( $\alpha$ 係数)を算出した結果、第1因子8項目0.799、第2因子5項目0.737と十分高かったので、それらの項目によって結果予期を測定することとした。

④運動に対する有能感：身体・運動的な有能感を現すと考えられる健康、体力、運動技能、精神的側面についての9項目について回答を求めた。尺度構成を行うために調査結果について因子分析を行ったところ、9項目すべてに負荷を持つ1因子しか認められなかった。9項目の信頼性係数( $\alpha$ 係数)は、0.900と非常に高かったので、それらの項目によって運動に対する有能感を測定することとした。

⑤勝敗に対する態度：石井らがこれまでに研究してきた勝敗に対する様々な考え方を含む態度項目を用いた。因子分析の結果、2つの因子が抽出された(表2参照)。第1因子に高い負荷のある項目はすべてスポーツにおいて勝つと重視するもので「勝利志向性」と解釈した。ただし、項目10は負荷量も小さく少し意味が異なるので尺度構成から外すこととした。第2因子は、因子負荷の高い項目はすべてスポーツを楽しむことで共通しているが、低いものには様々なものが含まれており、解釈が難しい。ここでは一応、因子負荷の高い5項目を重視し「レクリエーション志向性」として尺度構成することにした。信頼性係数( $\alpha$ 係数)を算出した結果、「勝利志向性」5項目0.798「レクリエーション志向性」5項目0.740となっている。

(杉原 隆)

### 3. 結果と考察

#### 1. スポーツキャリアパターンについて

本調査では、青少年期のスポーツキャリアパターンの実態を明らかにすることを目的の一つとしている。ここでは特にスポーツキャリアパターンの分類、男女差について明らかにしていく。また、今回の調査におけるキャリアパターンにおいてどのような種目の特徴が見られるのかについても検討する。

##### (1) スポーツキャリアパターンの分類

スポーツキャリアパターンの分類は次のような手順で行われた。小学校、中学校、高校、大学の各段階において体育の授業以外に定期的に行ってきましたスポーツ種目とその活動形態を記入するよう求めた。スポーツ種目は2つまで記入できるようになっており、1番目と2番目の2つの記入欄が設けられている。ここには、どちらの欄がより重要であるかについての指示はなされていない。活動形態はスポーツ少年団、スポーツ教室、スポーツクラブ、学校の運動部、その他の5つの中から選び、各種目ごとに記入を求めた。この調査方法では、種目や形態を考えると様々なパターンが考えられる。今回は小中高大の4段階に渡るスポーツ種目の参加状況の変化だけに絞り、活動形態は考慮せずにキャリアパターンを分類することとした。

スポーツ種目が合計8つの欄に記入されるが一つの種目が複数回記入された場合は、1番目2番目のどちらに記入してあっても記入回数をカウントして、記入回数の多い順に対象者の種目を決めていくこととした。尚、複数の種目が同じ回数記入されている場合は、1番目の欄に記入されている方を重要な種目とすることとした。つまり、種目の決定はまず、記入回数、次に同じ回数の場合は1番目の記入欄にかいてある方を考慮してなされた。

これらをわかりやすくするために、記号で表した。スポーツ種目を表す記号は○○△□の4つで、スポーツを行わないことを表すのが×の記号である。スポーツ種目については、重要なものから○△□の記号の順に使うこととした。従って1種

目の場合は○、種目が増えるにつれて○△□の順に記号が使われる。例えばサッカー、テニス、野球が記入され、サッカーが3回、テニスが2回、野球が1回の場合はサッカーが○、テニスが○、野球は△の記号で表される。これら○○△□×の5つの記号の組み合せから、キャリアパターンを分類した。パターンの決め方の例を次に示す。

例1) 小学校(ソフトボール)(サッカー)

中学校(サッカー)(未記入)

高校(サッカー)(未記入)

大学(テニス)(未記入)

この場合、小中高で同じ種目が続き、大学で二つ目の種目を行っているので、パターンは記号で○○○○と表わす。

例2) 小学校(ソフトボール)(剣道)

中学校(野球)(未記入)

高校(テニス)(卓球)

大学(スキー)(ゴルフ)

この場合、パターンは記号で○○△□と表わす。

例3) 小学校(ソフトボール)(剣道)

中学校(野球)(未記入)

高校(テニス)(未記入)

大学(野球)(未記入)

この場合、パターンは記号で○○△○と表わす。

例4) 小学校(未記入)(未記入)

中学校(卓球)(未記入)

高校(バドミントン)(未記入)

大学(テニス)(未記入)

この場合、パターンは記号で×○△と表わす。

例5) 小学校(陸上)(ソフトボール)

中学校(未記入)(未記入)

高校(陸上)(未記入)

大学(テニス)(スキー)

この場合、パターンは記号で○×○○と表わす。

以上のような考え方から小中高大の各段階にわたる種目への参加状況の変化を全部で52のパターンに分類した(表1-1)。さらに、52のパターンから、分類可能な型を抽出し、全体を次に示すような5つの型に分けた。

##### 1) 同一種目継続型

同じ種目を小中高大または中高大と続けて行

っているもの。

2) 異種目継続型

種目は異なるが小中高大、中高大、と何かの種目を行っているもの。

3) 中断復帰型

中高の段階でいったんスポーツをやめるがその後、やめる前と同じ種目又は新たな種目をはじめるもの。

4) 離脱型

中学、高校、大学いずれかの段階でスポーツから離脱し、その後は定期的にスポーツに参加していないもの。

5) 不参加型

小中高大のすべての段階で一度も定期的にスポーツに参加していないもの。

5つの型と男女別、全体の人数を表1-2、5つの型に含まれるパターンを表1-3～表1-7に示す。尚、52のパターンのうち5つのパターンは、上記の5つの型の典型的な特徴を示しているとは考えられないので、どの型にも含めなかった(表1-8)。

最終的に本調査では上記の5つの型からスポーツキャリアパターンをとらえることとした。

今回は、学校のクラブ、スポーツ少年団などの活動形態を考慮せずに、キャリアパターンを分類した。また、対象者の種目の決め方についても回数が優先された。調査用紙には2つの種目まで記入するように指示されているが、どちらの記入欄に本人にとって重要な種目を記入するか指示がされていない。次回の調査ではこれらの点を考慮して調査用紙を作成する必要があると思われる。

表1-1 キャリアパターンの52パターン

No.	パターン	男子	女子	全体
1	◎◎◎◎	61	27	88
2	◎◎◎○	19	13	32
3	◎◎○◎	8	3	11
4	◎○◎◎	2	1	3
5	○◎◎◎	41	21	62
6	◎○○○	13	5	18
7	◎○○○	2	0	2
8	○○○○	2	4	6
9	○○○△	13	7	20
10	○○○△	3	1	4
11	○○△○	4	4	8
12	○○○△	23	19	42
13	○○△○	2	5	7
14	○△○○	22	13	35
15	○○△□	17	18	35
16	○○○×	38	23	61
17	○○×○	3	4	7
18	○×○○	2	3	5
19	×○○○	5	10	15
20	○○○×	25	13	38
21	○○○×	6	4	10
22	○○×○	2	2	4
23	○○○×	33	30	63
24	○○×○	8	12	20
25	○×○○	5	6	11
26	○○×○	12	10	22
27	○×○○	2	1	3
28	○×○○	0	0	0
29	×○○○	10	8	18
30	×○○○	3	1	4
31	×○○○	8	9	17
32	○○△×	23	23	46
33	○○×△	17	18	35
34	○×○△	3	4	7
35	×○○△	9	8	17
36	○○××	35	28	63
37	○×○×	1	5	6
38	○××○	1	1	2
39	×○○×	24	18	42
40	×○○○	3	8	11
41	××○○	2	4	6
42	××○○	2	4	6
43	×○×○	7	16	23
44	×○○×	13	23	36
45	○××○	8	14	22
46	○×○×	8	9	17
47	○○××	38	75	113
48	×××○	6	11	17
49	××○×	6	5	11
50	×○××	25	62	87
51	○×××	18	45	63
52	××××	95	176	271
53	未記入	1	0	1
	合計	739	834	1573

表1-2 5つのパターンの男女別的人数

No.	パターン	男子	女子	全体
1	同一種目継続型	66	37	103
2	異種目継続型	160	119	279
3	中断復帰型	73	99	172
4	離脱型	292	358	650
5	不参加型	95	176	271
	合計	686	789	1475

表1-3 同一種目継続型の人数

パターン	男子	女子	全体
◎◎◎◎	61	27	88
×◎◎◎	5	10	15
合計	66	37	103

表1-4 異種目継続型の人数

パターン	男子	女子	全体
◎◎◎○	19	13	32
◎◎○◎	8	3	11
◎○◎◎	2	1	3
◎◎○○	13	5	18
◎○○○	2	0	2
◎○○○	2	4	6
◎◎○△	13	7	20
◎○○△	3	1	4
◎○△○	4	4	8
○○○△	23	19	42
○○△○	2	5	7
○△○○	22	13	35
○○△□	17	18	35
×○○○	10	8	18
×○○○	3	1	4
×○○○	8	9	17
×○○△	9	8	17
合計	160	119	279

表1-5 中断復帰型の人数

パターン	男子	女子	全体
◎◎×○	3	4	7
◎×○○	2	3	5
◎○×○	2	2	4
○○×○	8	12	20
○×○○	5	6	11
○○×○	12	10	22
○×○○	2	1	3
○×○○	0	0	0
○○×△	17	18	35
○×○△	3	4	7
○××○	1	1	2
×○×○	3	8	11
×○×○	7	16	23
○××○	8	14	22
合計	73	99	172

表1-6 離脱型の人数

パターン	男子	女子	全体
◎◎◎×	38	23	61
◎◎○×	25	13	38
◎○○×	6	4	10
○○○×	33	30	63
◎○△×	23	23	46
◎○××	35	28	63
×○○×	24	18	42
×○○×	13	23	36
○×○×	8	9	17
○○××	38	75	113
××○×	6	5	11
×○××	25	62	87
○×××	18	45	63
合計	292	358	650

表1-7 不参加型の人数

パターン	男子	女子	全体
××××	95	176	271
合計	95	176	271

表1-8 今回省いたもの及び未記入

パターン	男子	女子	全体
○○○○	41	21	62
○×○×	1	5	6
××○○	2	4	6
××○○	2	4	6
×××○	6	11	17
未記入	1	0	1
合計	53	45	98

## (2) スポーツキャリアパターンの男女差

5つの型の男女別の傾向をみると同一種目継続型、異種目継続型は男子の方が多く、中断復帰型、離脱型、不参加型は女子の方が多いという傾向がみられた(表1-2)。カイ二乗検定の結果、5つの型における男女差は有意であった。

同一種目継続型では、全体では男子の方が多い。小中高大の継続は男子が61名、女子27名で男子が多いが、中高大の継続は男子5名、女子10名と差はなくなっている。異種目継続型も男子の方が人数が多い。パターン別の人数をみると、男女ともほぼ同様の傾向を示している。中断復帰型、離脱型、不参加型については全体的には女子の方が多いという傾向がみられた。

### (3) 各段階におけるスポーツ種目について

各段階において行われたスポーツ種目は約60種目が挙げられた。このうち全体の人数が比較的多い18種目を選び特徴を検討した。各段階別、各種目別の競技人数をグラフ化したものが図1-1である。種目別の参加人数が異なるが、小中高大にわたる競技人数の変化のパターンから種目別の特徴が表れていると考えられる。

水泳・飛び込み・シンクロの種目、バスケットボール、サッカー、野球の4種目は今回の調査では小学校期における人数が最も多く、いずれも100名をこえる者が小学校期にこれらのスポーツを定期的に行っていた。これらの種目はいずれも小中高大と進むにつれて、人数が少なくなっている。

また小学校から大学までの落差が非常に大きい。これらの種目は競技人口も多いが、競技人口の変化も厳しいという特徴が見られる。

次に特徴がみられるのは、中学校で人数がピークになる種目である。バレー・ボール、剣道、陸上競技、卓球、軟式テニス、体操・新体操は中学校でピークをむかえている。高校で人数がピークになるのは、バドミントン、ラグビー、ハンドボール、弓道、アーチェリー・射撃で、中でも弓道・アーチェリー・射撃の方が他の競技に比べてその傾向が顕著であった。スキー、柔道はどの段階においても人数の差は少なく大きな変化は見られなかつた。すべての種目の中で、1つだけ異なる特徴を示していたのが、硬式テニスであった。小学校期の人数は極めて少ないが、中学校から高校で

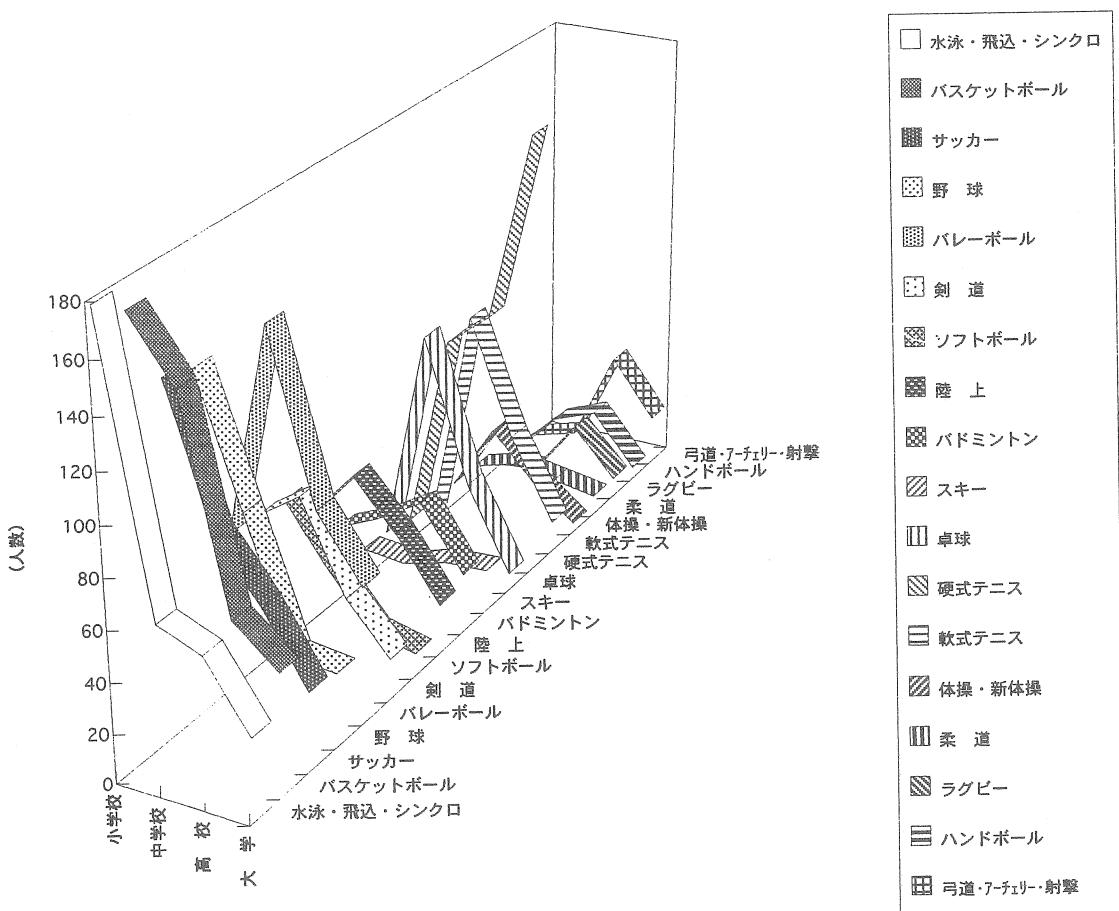


図1-1 各段階別の主要種目の人数

少し増え、高校から大学では著しい伸びを示している。尚、これら18種目以外の種目の特徴としては、ウインドサーフィン、パラグライダー、ハンググライダー、スノーボードといった比較的新しいスポーツが、人數は少ないが、大学に入ってから始めるという傾向がみられている。これら以外の種目については競技人數も少なく、典型的な特徴は認められなかった。

今回の調査では、種目ごとの人數が異なるので、種目間の単純な比較はできないが、種目内の小中高大に渡る人數の変化からある程度種目の特徴をみることができるとと思われる。次回の調査では各種目のサンプル数を増やすなどして、種目間についてもより詳細な分析を行えるようにしていく必要があると思われる。

#### (4) 各キャリアパターンにおけるスポーツ種目の状況について

5つのキャリアパターンにおける種目の特性について検討した。ただし、各種目、各段階ごとに競技人數が異なっているので、ここでは各キャリアパターン内でのスポーツ種目の状況をみることを目的として分析を進めた。

同じ種目を小中高大または中高大と継続する同一種目継続型の人は103名で、そのうち男子66名、女子37名であった。種目別にみると、最も人數が多いのがサッカーで男子21名であった。その次はバスケットボールで、男子8名、女子19名であった。後は剣道12名、野球11名、バレーボール8名、硬式テニス7名、他の種目は3名以下である。

中断復帰型の場合、ある種目をやめて同じ種目に復帰した者は男子19名、女子29名、全体で48名であった。そのうちバスケットボールが10名、バレーボール9名、硬式テニス9名、水泳・飛び込み・シンクロが4名、サッカー、バドミントンが3名であった。他の種目は2名以下であった。

中断型復帰型で、ある種目をやめて異なる種目

に復帰した者は全部で124名であった。その人達のやめた時の種目をみると、卓球17名、バスケットボール15名、水泳・シンクロ・飛び込みの13名、野球11名、サッカー8名などであった。

中断復帰型の人が復帰する時に、新たに始める種目として、どんな種目が多いのかをみると、一番多いのは硬式テニス43名で、うち男子17名、女子35名であった。その次は、バドミントン8名、登山6名、バレーボール6名、スキー5名で、他は4名以下で特に集中している種目はみられなかった。中断復帰型で、復帰後新たな種目を始める場合、硬式テニスが極めて多く、その他の種目に大きな差はみられなかった。

離脱型の者が最後に行っていた種目をみると、バレーボール75名、硬式テニス70名、バスケットボール68名、水泳・シンクロ・飛び込み57名、卓球49名、サッカー37名、陸上34名、軟式テニス34名、剣道32名、野球30名、バドミントン29名、体操・新体操24名、ソフトボール22名、弓道・アーチェリー・射撃21名、ハンドボール10名、ラグビー10名、柔道10名で他では特に多い種目はみられなかった。

これらの結果だけでは、競技人數、段階別の人數が異なるために種目とキャリアパターンとの関係についての厳密な分析はできない。今回の調査では各種目にどのようなパターンが多く含まれているのかについてある程度の傾向を見るのが限界である。種目別のキャリアパターンがどう異なるのかを明らかにしていくためには、種目ごとに多くのサンプルをとり他の変数を統一して分析する必要があると思われる。どのようなパターンが多く含まれているのかについてある程度の傾向を見るのが限界である。種目別のキャリアパターンがどう異なるのかを明らかにしていくためには、種目ごとに多くのサンプルをとり他の変数を統一して分析する必要があると思われる。

(杉山哲司)

## 2. キャリアパターンと結果予期、運動に対する有能感および勝敗に対する態度との関係

ここでは、前節でとりあげた小・中・高・大にわたってのスポーツ参加の形態である5つに分類されたキャリアパターン（同一種目継続型、異種目継続型、中断復帰型、離脱型、不参加型）の間には心理的特性にどのような違いが認められるかを分析検討した。図1は、性別にみたキャリアパターンの出現分布状況を示したものである。

ひとつの種目を一途に継続するもの、種目を変えて継続するもの、途中でやめるがある段階で再度復帰するもの、ある段階でやめて現在もやっていないもの、もともと最初から参加していないものの間には、そのおかれた立場でスポーツを行うあるいは行わない理由があり、また個人の欲求や態度や価値観などの心理的要因が影響していることは推測できることである。

本節は、心理的要因として、特に今から新たにスポーツを始めたとしてどのような結果が得られるかと思っているかという「結果予期」、スポーツ行動を規定していると考えられている「運動に対する有能感」、勝つことと楽しむことをどのように考えているかという「勝敗に対する態度」をとりあげて、キャリアパターンの各タイプの比較をした。

表1～5は各タイプの性別にみた5つの尺度の平均、標準偏差を示したものである。図2～6にはその結果を4段階評定値に換算してグラフに示す。

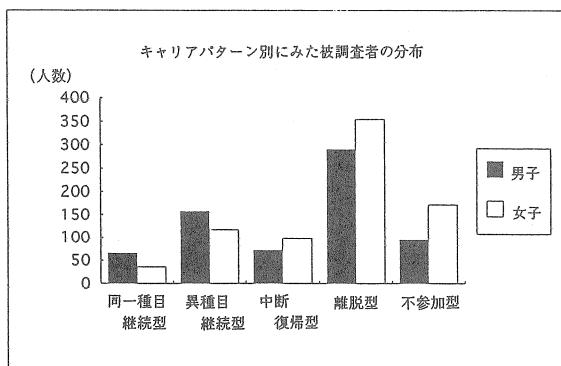


図1 キャリアパターン別にみた被調査者の分布

した。また、キャリアパターンと性の2要因分散分析の結果を示したのが表6である。

### 1) 結果予期について

今から新たなスポーツをやったとして期待できるなどを「上手くなれる」「体力がつく」「気分転換になる」「友人ができる」「認められる」「楽しめる」「健康に役立つ」「就職に有利」といったプラスの側面の8項目についてそれぞれ4段階評定したものの合計得点を肯定的結果予期得点とした。得点の幅は8～32点の範囲で高いほどスポーツをするといい結果が得られると考える傾向が強いことを意味する。

一方、「あきてしまう」「何の役にも立たない」「金や時間の無駄」「やりたいことができなくなる」「負けや失敗でいやになる」といったネガティブな側面から5項目それぞれ4段階評定で否定的結果予期を調べた。得点は5～20点の範囲で高いほどネガティブなものを肯定する傾向が強いことを意味する。

肯定的結果予期については表1、図2に結果を示した。分散分析で性差はないが、パターンの主効果で有意差が認められた。不参加型が極端に低い得点を示した。他の4つのタイプでは、離脱型が低い傾向を示した。もともと参加していない人というのは、スポーツが嫌いかまったく関心がないか体に問題があるかという人であろう。そのような人は、今から新たにスポーツを始めたとしても、体力や健康が身につくとか友達ができ認められるといったプラスの得られる効果についてはあまり期待できないというむしろ当然といえる反応である。他のタイプでは、離脱型が低い値を示したのは、ある段階でやめて現在も行っていない人はやれば効果があるという意識を多少はもちながら、他の活動に価値をおいているからと思われる。

また、否定的結果予期については表2、図3に結果を示した。全体的には、ネガティブな側面をかなり否定する傾向を示した。分散分析で性とパターンの主効果でともに有意差が認められ、女子の方が男子に比べてネガティブな側面をより否定する傾向が示された。また、不参加型が最も高い得点を示し、次いで中断復帰型、離脱型、最も低

表1 キャリアパターン別にみた肯定的結果予期の平均, 標準偏差

N.M.SD		M	SD	N
キャリアパターン				
全體		20.93	3.84	1563
同一種目継続型	全体	21.75	3.40	102
	男子	21.72	3.35	65
	女子	21.78	3.54	37
異種目継続型	全体	22.00	4.01	278
	男子	21.94	4.27	160
	女子	22.08	3.64	118
中断復帰型	全体	21.38	3.90	172
	男子	21.84	4.18	73
	女子	21.05	3.67	99
離脱型	全体	20.93	3.67	644
	男子	20.94	3.72	288
	女子	20.92	3.64	356
不参加型	全体	19.13	3.67	269
	男子	18.65	4.01	95
	女子	19.39	3.45	174

表2 キャリアパターン別にみた否定的結果予期の平均, 標準偏差

N.M.SD		M	SD	N
キャリアパターン				
全體		7.68	2.41	1562
同一種目継続型	全体	6.99	2.29	102
	男子	7.35	2.54	66
	女子	6.33	1.59	36
異種目継続型	全体	7.29	2.14	276
	男子	7.64	2.51	158
	女子	6.81	1.39	118
中断復帰型	全体	7.81	2.46	172
	男子	8.47	2.95	73
	女子	7.32	1.89	99
離脱型	全体	7.68	2.28	644
	男子	7.99	2.49	290
	女子	7.42	2.05	354
不参加型	全体	8.54	2.88	270
	男子	9.11	3.16	95
	女子	8.24	2.68	175

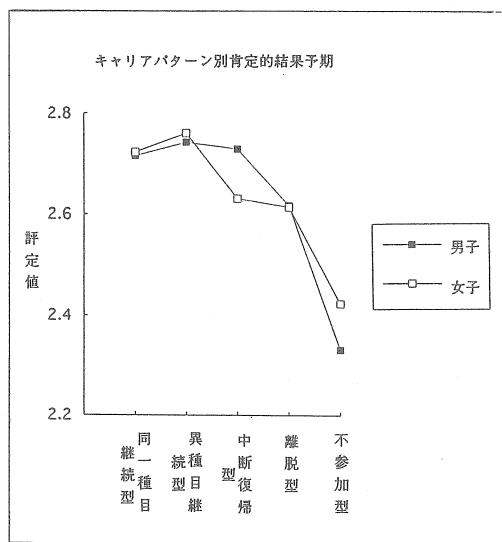


図2 キャリアパターン別にみた肯定的結果予期

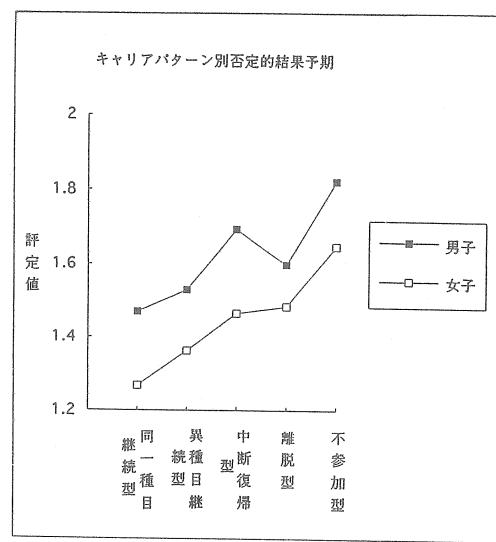


図3 キャリアパターン別にみた否定的結果予期

いのが継続型であった。すなわち、継続型の人はネガティブな側面に対しきわめて否定的であり、一度はやめている中断復帰型、離脱型は継続型に比べて多少高く、最も高い不参加型の人は他のタイプに比べてスポーツをしても何の役にも立たないとか金や時間の無駄とか他のやりたいことができなくなるという意識が多少あるようである。

以上の結果から、同じ種目あるいは異なる種目でずっと続けているというのは、プラスの側面を高く評価し、ネガティブな面をそれほど感じないから続けられているということであり、またある段階でやめて今もやめている、またもともと参加していないというのは、プラスの側面が多少低く評価され、ネガティブな面が意識され、表面にててスポーツから離れるということになるのであろう。

## 2) 運動に対する有能感について

「体力はある」「健康には自信がある」「運動は得意」「すぐにうまくなる」「運動が好き」「仲間と仲良くできる」「挑戦するのが好き」「楽しめる」「活動的」といった9項目についてそれぞれ4段階評定で運動に対する有能感を調べた。総合得点で9~36点の範囲で、得点が高いほど有能感が高いことを意味する。

運動に対する有能感は、スポーツ参加や行動を規定する重要な要因である。ここでの運動に対する有能感についての結果は、表3、図4に示した。分散分析で性とパターンの主効果とともに有意差が認められ、男子の方が女子に比べて高く、またパターンでは、最も高いのが同一種目継続型、次いで異種目継続型、中断復帰型、離脱型と続き、最も低いのが不参加型であった。すなわち、有能感が高いかどうかによってスポーツ参加形態であるキャリアパターンが予測できる。

ある種目を始め、ある段階で伸び悩み、自分には能力がなくて向いていないと考え、種目を変えるかそれともやめてしまうかの選択を迫られる経験を我々一度はしているであろう。それでも、その種目にこだわり続ける人は高い有能感をもっており、種目を変えて続ける人は多少低く、一度やめて復帰している人、離脱して二度とやっていな

表3 キャリアパターン別にみた運動に対する有能感の平均、標準偏差

N.M.SD キャリアパターン	M	SD	N
全 体	21.72	5.96	1568
同一種目継続型	全体	26.07	5.23
	男子	26.35	4.98
	女子	25.57	5.69
異種目継続型	全体	24.94	5.52
	男子	25.51	5.63
	女子	24.17	5.31
中断復帰型	全体	22.40	4.98
	男子	23.23	5.38
	女子	21.79	4.59
離脱型	全体	21.13	5.47
	男子	21.48	5.58
	女子	20.84	5.38
不参加型	全体	16.95	4.84
	男子	16.91	5.28
	女子	16.97	4.60

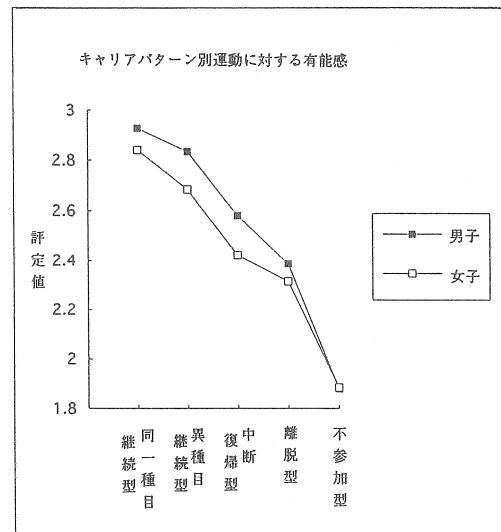


図4 キャリアパターン別にみた運動に対する有能感

い人はもっと低い。もともと参加していない人は最も有能感が低く、低いが故にスポーツを実施していないということであろうか。

杉原らの研究でも、特にスポーツが嫌いになるきっかけとして、主要因として能力の要因と恐怖の要因の2つをあげている。なかでも、できないとか努力してもだめだと負けるとかといった能力要因は、スポーツへの関わり方を規定する重要ななものであり、スポーツが嫌いになったり、離れてしまう原因として学習性無力感のメカニズムが働いていると考えられている。

このような現実を考えると、青少年期において運動に対する有能感を育てることが大事であるし、有能感がたとえ低くてもスポーツを積極的に楽しめる態度を身につけさせることが大切である。

### 3) 勝敗に対する態度について

「勝つことに意義」「勝ってこそ喜び」「魅力は勝負」「勝利の感激はなものにもかえがたい」「くやしい思いをしたくないので勝ちたい」といった5項目で勝利志向性を「ストレス解消」「余暇を楽しむ」「仲良く楽しく」「楽しむもので勝ち負けは重要ではない」「純粹に楽しむもの」といった5項目でレクリエーション志向性を調べた。

それぞれ4段階評定したものを合計し、5~20点の範囲で得点が高いほどその傾向が強いことを意味する。

勝利志向性の結果については表4、図5に示した。分散分析で性、パターンの主効果でともに有意差が認められ、男子の方が女子に比べて勝つことに価値をおく傾向がみられた。また、パターンでみると、男女ともに、同一種目継続型、異種目継続型、中断復帰型、離脱型、不参加型の順で勝ちたい傾向が強いことが示された。交互作用は5%で有意であった。

また、レクリエーション志向性の結果については表5、図6に示した。分散分析で性、パターンの主効果でともに有意差が認められ、女子の方が男子に比べて楽しむことに価値をおく傾向が強く、パターンでみると、男女ともに不参加型、離脱型、中断復帰型、異種目継続型、同一種目継続型の順で楽しみたい傾向が強いことが示された。なかで

表4 キャリアパターン別にみた勝利志向性の平均、標準偏差

キャリアパターン	N.M.SD		N
	M	SD	
全 体	11.38	3.15	1563
同一種目継続型	全体	12.73	3.36
	男子	13.50	3.29
	女子	11.31	3.04
異種目継続型	全体	12.17	3.29
	男子	12.59	3.65
	女子	11.58	2.64
中 断 復 帰 型	全体	11.58	3.07
	男子	12.59	3.10
	女子	10.83	2.82
離 脱 型	全体	11.20	3.02
	男子	11.80	3.34
	女子	10.70	2.62
不 参 加 型	全体	10.23	2.82
	男子	10.41	3.06
	女子	10.14	2.69

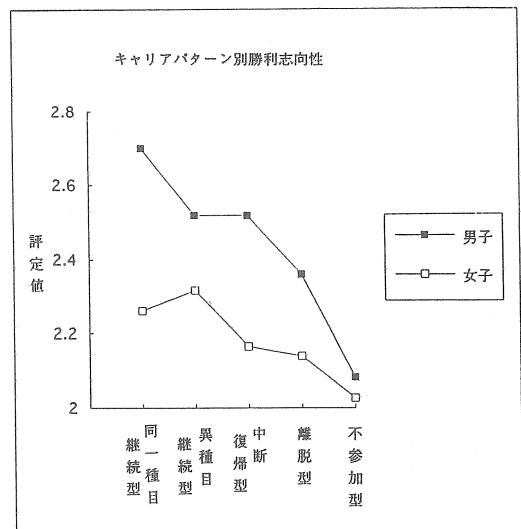


図5 キャリアパターン別にみた勝利志向性

表5 キャリアパターン別にみたレクリエーション志向性の平均、標準偏差

N.M.SD		M	SD	N
全 体		13.09	2.98	1558
同一種目継続型	全 体	11.99	2.68	102
	男 子	11.59	2.49	66
	女 子	12.72	2.88	36
異種目継続型	全 体	12.95	3.05	275
	男 子	12.84	3.21	158
	女 子	13.11	2.83	117
中 断 復 帰 型	全 体	13.13	2.90	170
	男 子	12.83	3.15	72
	女 子	13.35	2.69	98
離 脱 型	全 体	13.18	2.97	646
	男 子	12.95	3.07	291
	女 子	13.37	2.87	355
不 参 加 型	全 体	13.62	2.88	267
	男 子	13.43	3.06	95
	女 子	13.73	2.78	172

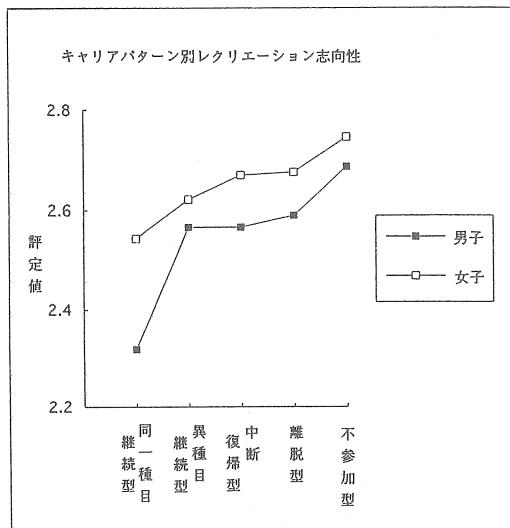


図6 キャリアパターン別にみたレクリエーション志向性

も同一種目継続型の男子において、極端に楽しむことには価値をおかず、勝つことに価値をおいて取り組んでいる傾向が示された。

ここでいえることは「勝ちたい」とことと「楽しみたい」とことは相反する関係にあるということである。また、勝ちたいという気持ちは、スポーツを継続させるひとつの要因であり、同じ種目を継続させる要因とも考えられる。

一方、楽しみたいという気持ちは、もともと参加していない人が最も高い得点を示し、一度でもやめた経験のある人が続き、継続して行っている人が一番低いという興味ある結果がでた。特に、不参加型の人はスポーツ嫌いと考えられがちであるが、楽しみたい気持ちは強いのである。友達と仲良く、いい汗を流し、ストレスを発散させ、余暇を楽しみたいと思っても、現実は勝負や能力がからみ、かえってストレスがたまり、純粋には楽しめないので現状である。スポーツの勝ち負けにこだわる部分のわざらわしさやできるできないことを評価される不愉快さに最初から抵抗があり、スポーツを避けてきたということであろうか。

青少年期において、勝ちたいことと楽しみたいことが同居できるスポーツの行い方や勝負を度外視した楽しみ方ができるやり方を工夫していく必要があるといえる。

#### 4) まとめ

大学生を対象としてスポーツキャリアパターンを5つに分類し、それぞれのタイプ間について結果予期、有能感および勝敗に対する態度を比較検討した。

その結果は、次のようにまとめられる。

1. 肯定的結果予期については、不参加型が極端に低い得点を示した。他の4つのタイプでは、離脱型が低い傾向を示した。性差は認められなかった。

2. 否定的結果予期については、女子の方が男子に比べてネガティブな側面をより否定する傾向が示された。また、不参加型が最も高い得点を示し、次いで中断復帰型、離脱型、最も低いのが継続型であった。

表6 キャリアパターンと性別による2要因分散分析の結果

項目	主効果		交互作用
	キャリアパターン	性	
肯定的結果予期	同、異>離>不 p < 0.001	中>不	
否定的結果予期	不>中、離>異、同 p < 0.001	男子>女子 p < 0.001	
運動に対する有能感	同、異>中>離>不 p < 0.001	男子>女子 p < 0.01	
勝利志向性	同、異>中、離>不 p < 0.001	男子>女子 p < 0.001	
レクリエーション志向性	不、離、中、異>同 p < 0.001	不>離、異 p < 0.01	女子>男子 p < 0.05

同 同一種目継続型  
 異 異種目継続型  
 中 中断復帰型  
 離 離脱型  
 不 不参加型

3. 運動に対する有能感については、男子の方が女子に比べて高く、またパターンでは、最も高いのが同一種目継続型、次いで異種目継続型、中断復帰型、離脱型と続き、最も低いのが不参加型であった。

4. 勝利志向性については、男子の方が女子に比べて顕著に勝つことに価値をおく傾向がみられた。また、パターンでみると同一種目継続型、異種目継続型、中断復帰型、離脱型、不参加型の順で勝ちたい気持ちが強いことが示された。

5. レクリエーション志向性については、女子の方が男子に比べて楽しむことに価値をおく傾向が強く、パターンでみると不参加型、離脱型、中断復帰型、異種目継続型、同一種目継続型の順で楽しみたい気持ちが強いことが示された。

以上の結果から、キャリアパターンと心理的特性である結果予期、有能感および勝敗に対する態度はきわめて高い関連性があることが示された。すなわち同じ種目にこだわって続けている人、ある段階で種目を変えて続けている人、ある段階で一度やめたがある段階で復帰している人、ある段階でやめてしまつて今もやっていない人そして最初からやっていない人には、続ける理由、転向する理由、やめる理由、復帰する理由、やらない理由が当然考えられるが、ここでみた結果予期や有能感や勝敗に対する態度がかなり影響していると

考えられた。

勿論キャリアパターンの内容をさらに詳しく検討することも必要であろう。たとえば、離脱型に関しては、中学、高校、大学のどの段階でやめたのかによって心理的特性は異なることが予想される。また中断復帰型もどの段階でやめていつ復帰したかによっても、またやめた理由や復帰した理由によっても異なることが考えられる。これらの点については今後さらに詳しく検討していきたいと考えている。

## 参考文献

- 1) 加賀秀夫他「中高年者のスポーツ参加に関する社会学的・心理学的研究」第1報  
平成3年度 日本体育協会スポーツ医・科学報告 1992
- 2) 加賀秀夫他「中高年者のスポーツ参加に関する社会学的・心理学的研究」第2報  
平成4年度 日本体育協会スポーツ医・科学報告 1993
- 3) 杉原隆、小橋川久光「スポーツに対する好みと興味」  
末利博他編 『スポーツの心理学』 pp71-85 福村出版 1988.
- 4) 石井源信他「体育・スポーツに対する態度および志向性を規定する要因分析」東京工業大学人文論叢, 9 : 115-127, 1984

(石井源信)

### 3. スポーツ継続意識と結果予期、有能感、および勝敗に対する態度との関係

青少年期のスポーツ参加意識を明らかにしていく上で、参加を規定する心理的要因としては、結果予期、運動に対する有能感、および勝敗に対する態度が重要であると考えられる。そこで、これらの要因が、スポーツ継続意識にどのように影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的とした。

生涯スポーツを振興していく上で、現在、スポーツを実施している者（以後、実施群）の継続意識と、実施していない者（以後、非実施群）の参加意識を分離して考察する必要がある。そこで、2つに分けて、それぞれ比較検討した。

#### 1) 実施群の中の積極的参加希望群、現状維持希望群、消極的参加希望群の比較

現在、授業以外のスポーツ活動を実施している大学生の中で、将来のスポーツ活動をより積極的にやりたいと思っている者と、現在の活動程度を維持したいと思っている者と、現在よりも少なくするか、もうやめたいと思っている者の心理的特性を比較した。

ここでのグルーピングは、問7「将来の運動やスポーツ活動」について、「事情が許せば、これまで以上にやりたい」、「さらに条件を整えてもっと積極的にやるつもり」と回答した者を、積極的実施希望群（以後、積極的群）とし、「現在行ってい

る程度でやりたい」と回答した者を、現状維持希望群（以後、維持群）とし、「もうやめたい」「これまでよりは少なくしてやりたい」と回答した者を、消極的実施希望群（以後、消極的群）とした。

図1には、実施群における積極的群、維持群、消極的群別にみた対象者数を示した。男女とも、積極的群がほぼ50%を占め、実施者の半数が現在より多くの運動実施を希望している。一方、消極的群は、ほぼ10%で、実施者の1割前後が、現在よりも運動を減らしたいと思っている。なお、もうやめたいと思っている者は、男女ともに1%に達していない。表1には、実施群におけるスポーツ継続意識と性の2要因分散分析の結果を示した。

#### (1)結果予期について

結果予期は、因子分析の結果、肯定的結果予期と否定的結果予期に分けられる。

積極的群、維持群、消極的群の肯定的結果予期得点については、図2に示した。分散分析の結果、実施希望の主効果が有意であった。性に関係なく、積極的群の方が、消極的群や維持群よりも、新たなスポーツを始めた場合良い結果が得られるという意識が高い。

積極的群、維持群、消極的群の否定的結果予期得点については、図3に示した。分散分析の結果、実施希望の主効果と性の主効果が有意であった。性に関係なく、消極的群や維持群の方が、積極的群よりも、新たなスポーツを始めた場合良くない結果が得られるという意識が高い。これは、肯定的結果予期の裏返しの結果である。また、希望に關係なく、男子の方が、女子よりも、スポーツによって良くない結果が生じることを強く意識している。

これらのことから、今後、運動実施を積極的に希望するか、消極的になるかの差異は、スポーツによって良い結果が得られると思っているか、良くない結果が得られると思っているかによることが非常に明確に示された。

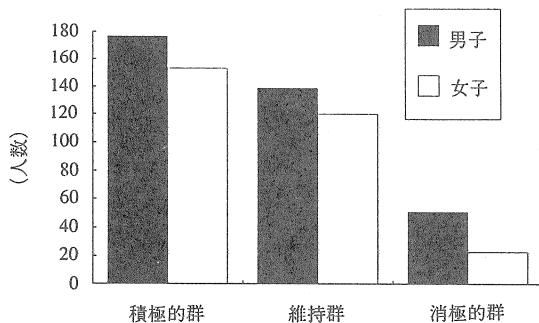


図1 実施群の積極的、維持、消極的実施希望別にみた被調査者の分布

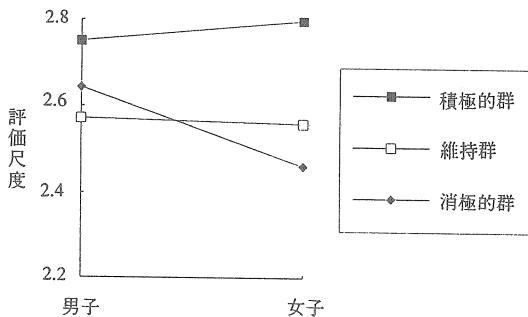


図2 肯定的結果予期の積極的群と維持群と消極的群の比較

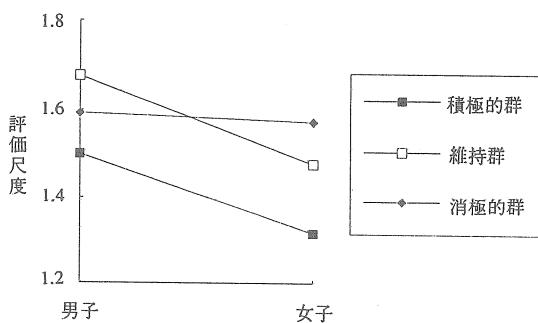


図3 否定的結果予期の積極的群と維持群と消極的群の比較

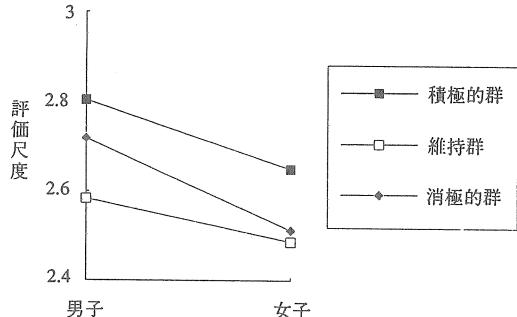


図4 運動に対する有能感の積極的群と維持群と消極的群の比較

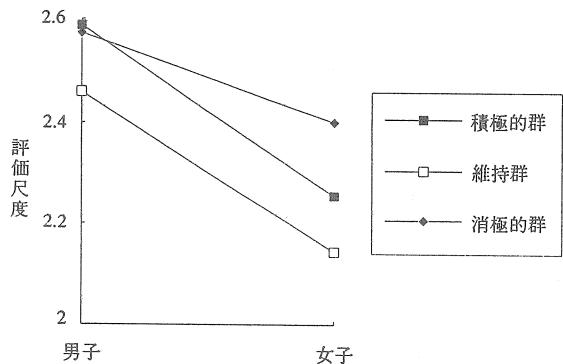


図5 勝利志向性の積極的群と維持群と消極的群の比較

## (2)運動に対する有能感について

積極的群、維持群、消極的群の運動に対する有能感得点については、図4に示した。分散分析の結果、実施希望の主効果と性の主効果が有意であった。積極的群の方が、維持群よりも、運動に対して高い有能感を示している。統計的に有意ではないものの、維持群は、消極的群よりも低い有能感である。高い有能感を持つ者は、自己の有能感を満たす場を求めて、積極的実施を希望するのであろう。これに対し、期待していた有能感が満たされない者は、参加希望が消極的になるのであろう。そして、当初から有能感が低い者は、スポーツによって有能感が満たされることを期待していないため、現在と同程度のスポーツを希望するのではないだろうか。

また、男子の方が、女子よりも運動に対する高

い有能感を示している。これは、男子の方が運動能力的に優れていることや、女子には、活動的で挑戦的であるよりも、落ち着いていておとなしいことを期待する社会的な女性観が影響しているのかもしれない。

## (3)勝敗に対する態度について

勝敗に対する態度も、因子分析の結果、勝利志向性とレクリエーション志向性に分けられる。

積極的群、維持群、消極的群の勝利志向性得点については、図5に示した。分散分析の結果、実施希望の主効果と性の主効果が有意であった。積極的群と消極的群の方が、維持群よりも、スポーツにおいて勝つことを重視している。勝つことを重視するが故に、勝つことが多いと積極的に参加を希望するし、勝つことが少ないと消極的になる

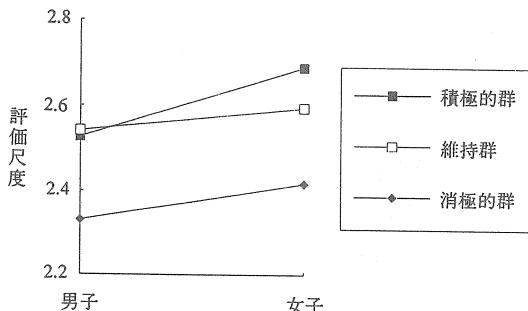


図6 レクリエーション志向性の積極的群と維持群と消極的群の比較

と考えられる。維持希望群は、勝つことを重視していないので、現在と同程度のスポーツができれば良いと考えているのではないだろうか。

また、男子の方が、女子よりも勝敗を重視している。この点は、Kleiber & Hemmer(1981)などの先行研究で指摘されている性差を支持するものである。

積極的群、維持群、消極的群のレクリエーション志向性得点については、図6に示した。分散分析の結果、実施希望の主効果と性の主効果が有意であった。積極的群と維持群の方が、消極的群よりも、スポーツを楽しんでいる。スポーツを楽しんでいるため、現在と同程度、あるいは、より積極的に参加を希望し、スポーツをそれほど楽しんでいないために、参加希望が消極的になると考えられる。

また、女子の方が、男子よりもスポーツを楽しんでいる。この点は、男子が勝敗を重視していることに対し、女子は勝敗を決するのをあまり好まない傾向があるためであろう。

これらのことから、積極的な参加を希望する者は、勝利志向性もレクリエーション志向性も高い。彼らは、勝つことによる魅力を感じつつ、スポーツそのものも楽しんでいる。これに対し、現在と同程度の参加を希望する者は、レクリエーション志向性が高く、勝利志向性は低い。彼らは、勝つ

ことに魅力をあまり感じず、スポーツそのものを楽しんでいる。さらに、消極的に参加を希望する者は、勝利志向性が高く、レクリエーション性は低い。彼らは、スポーツに勝つことしか意味を見いだしていなくて、スポーツそのものを楽しんではいない。スポーツは勝利という目的を得るための手段になっており、内発的な動機づけが消失しがちである。

また、性差についてみると、男子は勝利志向性が高く、女子はレクリエーション志向性が高い。競争能力が社会的に重視されやすい男子と重視されにくい女子の差であろう。

## ま と め

授業以外のスポーツ活動を実施している大学生の中で、将来のスポーツ活動をより積極的にやりたいと思っている者と、現在の活動程度を維持したいと思っている者と、現在よりも少なくするか、もうやめたいと思っている者に対して、結果予期、運動に対する有能感、勝敗に対する態度について比較したところ、下記のようなことが明らかになった。

1. 男女とも積極的希望群の方が、消極的希望群や維持希望群よりも、肯定的結果予期が高く、否定的結果予期は低い。積極的希望群は、新たな運動を始めて、良い結果が得られやすく、良くない結果は得られにくいと考えている。
2. 男女とも積極的希望群の方が、維持希望群よりも、運動に対する有能感が高い。
3. 男女とも消極的希望群や積極的希望群の方が、維持希望群よりも、勝利志向性が高く、スポーツにおいて勝つことを重視している。
4. 男女とも積極的希望群や維持希望群は、消極的希望群よりも、レクリエーション志向性が高く、スポーツそのものを楽しんでいる。

以上の結果は、運動を実施している者の参加希望程度が、結果予期や運動に対する有能感および勝敗に対する態度によって、影響を受けていることを示唆するものである。

## 2) 非実施群の中の参加希望群と参加拒否群の比較

生涯スポーツを推進することを念頭においた場合、身体的能力の高い学生時代にスポーツ活動に参加しない者の心理的要因を把握することは非常に重要であると思われる。そこで、現在、授業以外のスポーツ活動を実施していない大学生の中で、できればスポーツ活動をやりたいと思っている者と、今後もスポーツ活動をやろうと思わない者の心理的特性を比較した。

ここでのグルーピングは、質問紙の問7「将来の運動やスポーツ活動」について、「できれば何らかの運動やスポーツをやってみたい」と回答した者を実施希望群とし、「今後も運動やスポーツをやろうと思わない」と回答した者を実施拒否群とした。

図7には、非実施群における参加希望群と参加拒否群別にみた対象者数を示した。男女とも、参加希望群が90%を越えており、非実施者のほとんどが運動実施を希望している。一方、参加拒否群は、10%に達していなくて、女子においては5%にすら達していない。このことから、男女ともに、運動を実施したいのであるが、何らかの理由で実施していない者が非常に多いことが明らかである。

表2には、非実施群におけるスポーツ参加意識と性の2要因分散分析の結果を示した。

### (1)結果予期について

参加希望群と参加拒否群の肯定的結果予期得点については、図8に示した。分散分析の結果、参加の主効果が有意であった。性に関係なく、参加希望群の方が、参加拒否群よりも、新たなスポーツを始めた場合良い結果が得られるという意識が高い。

参加希望群と参加拒否群の否定的結果予期得点については、図9に示した。分散分析の結果、実施希望の主効果と性の主効果が有意であった。性に関係なく、参加拒否群の方が、参加希望群よりも、新たなスポーツを始めた場合良くない結果が得られるという意識が高い。これは、肯定的結果予期の裏返しの結果である。また、希望に関係なく、男子の方が、女子よりも、スポーツによって

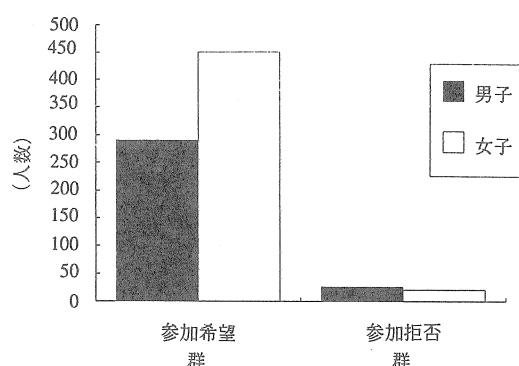


図7 非実施群の参加希望、参加拒否別にみた被調査者の分布

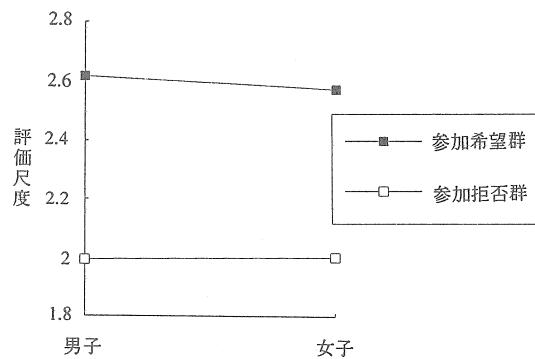


図8 肯定的結果予期の参加希望群と参加拒否群の比較

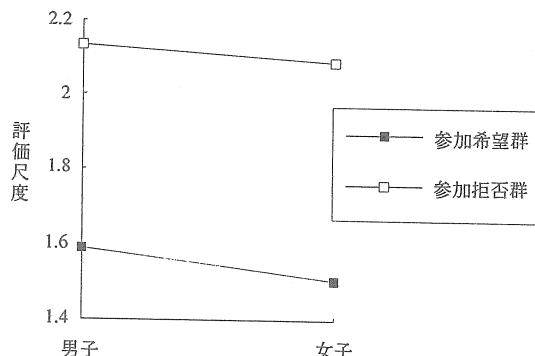


図9 否定的結果予期の参加希望群と参加拒否群の比較

良くない結果が生じることを強く意識している。

これらのことから、今後、運動参加を希望するか、拒否するかの差異は、スポーツによって良い結果が得られると思っているか、良くない結果が得られると思っているかに基づくことが示唆された。

### (2)運動に対する有能感について

参加希望群と参加拒否群の運動に対する有能感得点については、図10に示した。分散分析の結果、参加の主効果と性の主効果が有意であった。性に関係なく、参加希望群の方が、参加拒否群よりも、運動に対する有能感が高い。運動に対する有能感が高いから、運動参加を希望するのであろう。

また、男子の方が、女子よりも運動に対する高い有能感を示している。これは、運動実施者における場合と同様の理由によると思われる。

### (3)勝敗に対する態度について

参加希望群と参加拒否群の勝利志向性得点については、図11に示した。分散分析の結果、性の主効果のみが有意であった。

男子の方が、女子よりも勝敗を重視している。これも、運動実施者における場合と同様である。

参加希望群と参加拒否群のレクリエーション志向性得点については、図12に示した。分散分析の結果、性の主効果のみが有意であった。

女子の方が、男子よりもスポーツを楽しんでいる。この点も、運動実施者における場合と同様である。

これらのことから、運動参加を希望する者と拒否する者とでは、勝利志向性やレクリエーション志向性に差がみられない。非実施者の運動参加希望については、勝敗に対する態度とは直接結びつかないと考えられる。

また、性差についてみると、男子は勝利志向性が高く、女子はレクリエーション志向性が高い。この点も、運動実施者における場合と同様である。

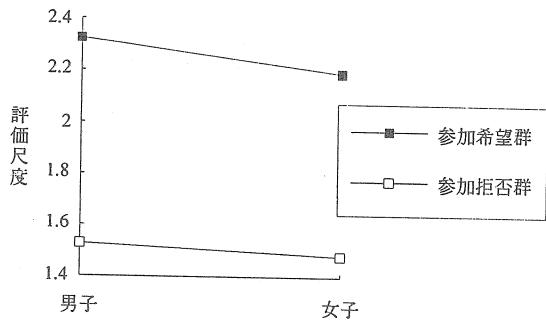


図10 運動に対する有能感の参加希望群と参加拒否群の比較

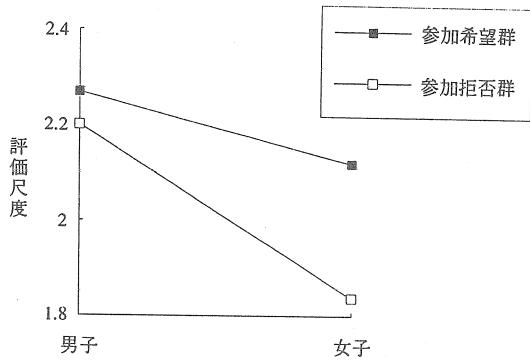


図11 勝利志向性の参加希望群と参加拒否群の比較

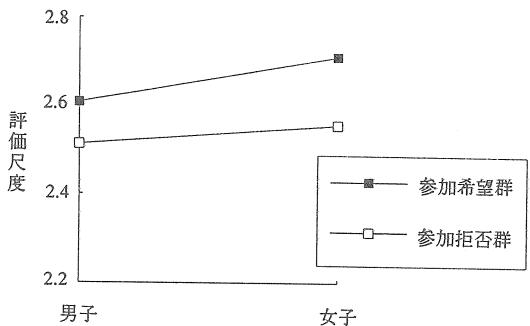


図12 レクリエーション志向性の参加希望群と参加拒否群の比較

## ま と め

授業以外のスポーツ活動を実施していない大学生の中で、今後、スポーツ活動に参加する希望をもっている者と、今後も、スポーツ活動への参加を拒否する者に対して、結果予期、運動に対する有能感、勝敗に対する態度について比較したところ、下記のようなことが明らかになった。

1. 男女とも参加希望群の方が、参加拒否群よりも、肯定的結果予期が高く、否定的結果予期は低い。参加希望群は、新たな運動を始めて

も、良い結果が得られやすく、良くない結果は得られにくいと考えている。

2. 男女とも参加希望群の方が、参加拒否群よりも、運動に対する有能感が高い。
3. 男女とも勝敗に対する態度（勝利志向性、レクリエーション志向性）において、参加希望の有無による差はみられない。

以上の結果は、運動を実施していない者の参加希望の有無が、結果予期や運動に対する有能感によって、影響を受けていることを示唆するものである。

（筒井清次郎）

#### 4. ま と め

スポーツキャリアパターンを同一種目継続型、複数種目継続型、中断復帰型、離脱型、不参加型に分類したところ、同一種目継続型と複数種目継続型は男子の方が多い、中断復帰型、離脱型、不参加型は女子の方が多いことが明らかになった。また、種目別に見ると、水泳、バスケットボール、サッカー、野球の4種目は、小学校期がもっとも多く、以後急減する。これに対して、テニスだけは小中高大と増加の一途をたどっている。

離脱方と非参加型はポジティブな結果予期が他の型より低く、スポーツを行ってもあまりいいことはないと考えていることが明らかになった。

運動に対する有能感は同一種目継続型、複数種目継続型、中断復帰型、離脱型、不参加型の順で高く、有能感とスポーツキャリアパターンとの密接な関係が認められた。

勝利志向性も同一種目継続型、複数種目継続型、中断復帰型、離脱型、不参加型の順で高く、レク

リエーション志向性は逆の順序で高く、スポーツに対して勝ち負けを重視するか楽しみを重視するかがキャリアパターンと関係することが示唆された。

大学でのスポーツ実施者を、将来にわたる積極的実施者と、現状維持・消極的実施者に分けて比較したところ、前者は後者より、ポジティブな結果予期が高く、ネガティブな結果予期が低く、有能感が高かった。結果予期と有能感が将来にわたるスポーツ継続意識に影響するものと思われる。

大学でのスポーツ非実施者を、今後実施を希望する者としない者に分けて比較したところ、前者は後者よりポジティブな結果予期が高く、ネガティブな結果予期が低く、有能感と勝利志向性が高かった。この結果も、結果予期や有能感や勝利志向性がキャリアパターンと関係することを示している。

(杉原 隆)

